令和５年度　甲賀市城郭歴史フォーラム

甲賀の中世城館と
伊賀・乙訓の城

資料集

令和６年１月２０日（土）　あいこうか市民ホール

主催：甲賀市教育委員会

令和５年度　甲賀市城郭歴史フォーラム

「甲賀の中世城館と伊賀・乙訓の城」

日　　程

開催日　令和６年（2024年）1月20日（土）
会　場　甲賀市あいこうか市民ホール

12:30　　開場・受付開始

13：00～　　主催者挨拶

13：10～13：50　事例報告１　「伊賀の城」
　　笠井　賢治（伊賀市教育委員会文化財課）

13：50～14：30　事例報告２　「乙訓の城」
　　福島　克彦（大山崎町歴史資料館）

14：30～15：10　事例報告３　「甲賀の城」
　　伊藤　航貴（甲賀市教育委員会歴史文化財課）

15：10～15：30　休　憩

15：30～16：30　フォーラム「甲賀の中世城館と伊賀・乙訓の城」
　　コーディネーター　中井　均（滋賀県立大学名誉教授）
　　パネラー　　笠井　賢治
　　福島　克彦
　　伊藤　航貴

目　　次

事例報告１　伊賀の城・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
笠井　賢治（伊賀市教育委員会　文化財課）

事例報告２　乙訓の城　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
福島　克彦（大山崎町歴史資料館）

事例報告３　甲賀の城・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
伊藤　航貴（甲賀市教育委員会歴史文化財課）

伊賀の中世城館

伊賀市教育委員会文化財課
笠井賢治

はじめに

三重県の西部に位置し、四周を山々に囲まれた伊賀地域は、東西約 30 km、南北約 40 km の範囲に 650 カ所以上の中世城館が確認されていて、全国的にも中世城館が濃密に分布するところとして知られている。

伊賀地域の中世城館の本格的な調査・研究の契機となったのは、三重県教育委員会による悉皆調査とその成果である『三重の中世城館』の刊行であり（１）、その後、福井健二を中心とする伊賀中世城館調査会によって調査が続けられ、その成果は『伊賀の中世城館』としてまとめられ（２）、現在もその活動が続けられている。

伊賀地域の中世城館の分布と形態について、山本雅靖は、大字（近世村）に複数箇所、場合によっては連続するように分布していることを特徴とし、形態については 87.4％が方形で四方を土塁で囲むもの（方形城館）としている（３）。山本の分析以後、福井らの調査によって確認された城館数は増えたものの、その傾向に大きな変化は見られないものと思われる。さらに、この頃から圃場整備事業等の開発事業の増加により、発掘調査資料も蓄積されることとなった。駒田利治は、伊賀の中世城館の発掘調査例を総括し（４）、森川常厚は検出された遺構から郭内の建物配置の規則性を検討した（５）。

伊賀の中世城館

伊賀地域の中世城館の大多数は、一辺 50 ｍの方形のもので、地表面観察では単郭に見えるものが多いが、丘陵上にあるものや発掘調査が行われたものの中には複数の郭が付属していることがわかる場合がある。立地は、沖積地の集落内や集落背後の丘陵に位置していて、複数の城館が連続して所在する場合もある。主郭は基本は四方を土塁で囲むが、沖積地の場合は四周に堀を掘り土塁を積み上げ、丘陵地の場合は尾根を削り出して土塁としている（６）。

伊賀地域の中世城館の特徴は、濃密な分布と集落内に複数所在することであるが、その典型例である、壬生野地区川東集落の状況を紹介する（図１）。

壬生野地区は、近世村から続く川東・川西・山畑・西之沢の各集落から構成されるが、中世には春日社領壬生野荘があり、その中心であったのは春日神社の所在する川東集落と、滝川を挟んだ川西集落であったと思われる。

川東集落には、北から沢東館跡、沢西館跡、ほぼ中央に五百田館跡と大深館跡、その南にはやや規模の大きい沢村館跡、一部の土塁が残存する三根館跡がある。また東側の丘陵の先端には壬生野城跡、丸山城跡がある。そして春日神社の北、裏山に位置するところに春日山城跡がある。

集落内に点在する方形城館の規模は、いずれも一辺 50 m前後で、土塁で囲まれた内側には現在も住宅が建つものもある。例えば沢東館跡では、高さ 2.5 m程度の土塁が四方を巡り、南側の中央部が開口する。東側は宮川、西側は段差のある地形となっていて、高低差のない北側には堀切を設けて遮断している。大深館跡と五百田館跡は隣接して所在し、南側を除く三方に高さ 2.0 m程度の土塁が残り、五百田館跡では北側に二重の土塁の残痕、大深氏館では堀跡が残る。四方を巡る土塁が良好な形で残り川東集落でひときわ目を引く沢村館跡は、南北の中央部が開口して、北側には伏流水を水源とする水堀がある。北西隅の土塁はやや高く、平面三角形状を呈して見張台のような施設があったのかも知れない。

丘陵の先端に位置する壬生野城跡・丸山城跡も平面は方形を基本としている。壬生野城跡は、丘陵が続く北・東側に堀を設け高い土塁を築いているが、地形による高低差のある西・南の土塁は低くなっている。北・東の土塁は所々窪んでおり狭間の役割を果たしていたと思われる。丸山城跡も東と北・南の丘陵と続く部分に高い土塁を設け、特に虎口を設けた南側の土塁は高く防御を厳重にしている。壬生野城跡・丸山城跡は、集落から離れた丘陵上に立地することや防御性の高さから、集落内にある住居の用途とは異なり、戦時に備えた詰城のようなものと理解されている。

発掘された中世城館

昭和 50 年代以降の圃場整備事業や道路建設などの開発事業に伴い、中世城館の発掘調査が行われてきた。なかでも中世城館の大部分を発掘調査した事例からその規模や構造を紹介したい。

伊賀市のほぼ中央部、「万町の沖」といわれる広い沖積地に位置する羽根集落の北方に所在した箕升氏館跡は、1992 年にほぼ全面が発掘調査された（７）。

館跡は堀の外側で東西約 52 m、南北約 60 mの規模である（図２）。堀跡は、北・東側で幅約８m、深さは 1.4 ～ 1.7 mである。館跡の東側には土橋状の入口がある。四方を巡る土塁は幅６～９m程度、北側に残存する土塁の郭内との比高差は約 2.6 mで、東端は一段高くなる。

郭内の遺構は、郭内の北よりの奥まったところに建て替えも含む掘立柱建物４棟があり、うち２棟は礎石建物である可能性が指摘されている。また、建物と入口との間を遮るように柵列があり、石組井戸１基、土坑などもある。さらに、館跡の東側にも建物跡と溝が検出されていて、被官層が居住したであろう付属区画と推定されている。館の存続時期は 16 世紀中頃から後半にかけての時期とされている。

伊賀市の北東部、上友田集落の背後の丘陵上に所在した菊永氏城跡は、1986 年に主郭の大半と付属する郭の半分程度が発掘調査された（８）。

主郭は入口のある南側が広くなる台形状を呈し、土塁下端で東西 55 m、南北 55 である（図３）。北側は上端幅 5.0 から 6.3 m、深さ 2.8 mの断面台形を呈する堀があり、調査結果から北側の堀が西・東に続くと推定されている。四方を巡る土塁は、基底部幅 10 m程

度の大規模なもので、東側土塁は郭内との比高差３ｍを計る。土塁の上端部は平坦で、南東・北東隅は広くなっている。北・西側土塁は、東側と比べ一段低いが、北西隅が櫓台状の高まりとなり、正面の南側土塁も高くなっている。

主郭内部からは掘立柱建物３棟、井戸１基、溝などが検出された。主屋は主郭の奥まったところにあり、中央と南よりのところにも建物が２棟検出された。また、東側に井戸と土坑が確認されているほか、郭内の区画・排水のための溝も検出されている。

菊永氏城跡の調査では、主郭南側の平坦地からも掘立柱建物が複数検出された。主郭の南側に開口する虎口は食い違いとなっていて、通路の両側を掘削して土橋状となって郭２に通じる。さらにその南側に郭３・４が階段状に続く。郭２～４では、掘立柱建物が複数検出されるなど遺構密度が濃く、一定量の遺物も出土している。郭２～４は、その位置と規模から主郭に対して従属的な位置にあって、そうした立場の者が居住する区画であったと想定される。なお、郭２～４の西側は主郭へつながる通路と想定されているが、この通路は主郭入口手前で屈曲していることや郭２から横矢が効くよう配置されており、主郭への侵入を阻むよう防御に工夫を凝らしている。城跡の存続時期は、16 世紀前半後葉から 16 世紀後半とされている。

中世城館出土の遺物

発掘調査で出土した遺物として箕升氏館跡のものを例示すると（図４）、土器類は、土師器皿・鍋・羽釜、陶器天目茶碗、折縁皿・丸皿、擂鉢・鉢・甕、瓦質火舎、白磁・青磁皿などがあり、その器種構成は、伊賀地域の中世城館出土の土器・陶磁器の一般的な様相を示している。箕升氏館跡から木製品の出土はないが、他の城館跡の調査では、下駄や漆椀などの木製品の出土例もある。

これらのうち、土師器の煮炊具は、13 世紀頃まで多くみられた大和型羽釜は例外的な存在となり、南伊勢系の土師器鍋が多数を占めるようになる。火舎など瓦質土器は引き続き大和系のものである（９）。陶器の椀・皿類は瀬戸産のもので、甕類は常滑産で一定量みられるが、時期が下るにつれて信楽産が多くを占める傾向にある。擂鉢はほぼ信楽産である（10）。また、貿易陶磁器は、青磁・白磁の碗・皿が少量出土する例が大半である。城館出土の土器・陶磁器は、広域流通する瀬戸・常滑産の陶器は別として、搬入先は器種によって異なるが大和・近江・伊勢の近接地域からの搬入品によって構成されている。また、威信財的なものはあまりなく、城館居住者の階層性を示している。

伊賀の中世城館と惣国一揆

先に紹介した壬生野荘では、春日神社に伝わる古文書から、中世後期には「五百田殿」「澤村殿」など「諸侍」と表記される地域の侍衆により神社祭祀や地域運営が行われていた。中世伊賀国では、壬生野荘のほかにも服部郷諸侍、島ヶ原諸侍といった一定の範囲を領域とする自治運営組織、惣荘・惣郷が各地にあったことが史料から窺える。惣国一揆各地の

惣荘・惣郷で主導的役割を果たしたのが諸侍、侍衆であり、彼らが拠ったのが方形城館と考えられる。方形城館の規模に突出したものが見られないことも、突出した権力が存在せず、諸侍が合議により地域運営されていたことの証左といえよう。また、こうした惣荘・惣郷の集合体が「伊賀惣国」であり、諸侍・侍衆は、伊賀惣国一揆掟書にみえる「惣国之諸侍」として、伊賀国の地域運営の主体者でもあった（11）。

伊賀の山城

沖積地や丘陵上に土塁で四方を囲むタイプが多くを占める伊賀の中世城館のなかで、例外的に山頂に築かれるものがある。一つは山岳寺院を城郭に転用したもので、もう一つは伊賀の中世城館に見られない要素を含むものである。

前者の代表例が伊賀市長田に所在する比自山城跡である（図５）。上野盆地を東に見下ろす比自山山頂にあり、いわゆる天正伊賀の乱で伊賀衆と織田軍との激戦の舞台となったことで知られる。

比自山城跡は、東西約 200 m、南北約 400 mにわたる大規模なもので、方形の城館が大半を占める伊賀では珍しい山城である。また、山麓の集落に近いところの尾根筋にも、比自山城を守るように長田丸・朝屋丸と呼ばれる郭がある。

城跡は、寺院があったと考えられる広い平坦地を主郭として、丘陵の南北 400 m範囲を堀切で区切り、平坦地の南北の最高所に一辺 20 m程度の方形の郭を配置し周囲に郭や堀切を幾重にも配置している。また､防御と連絡通路を兼ね備えた犬走りも各所に見られる。山城でありながらも方形の郭を最高所に配置し、伊賀の中世城館のプランを踏襲している点が興味深い。この城跡は、同地にあった寺院を織田軍の侵攻に備えて城に転用されたとされ、天正 10 年（1582）の織田信長の死後に伊賀衆が蜂起した際の拠点となった。

先述した壬生野荘の鎮守であった春日神社の背後の春日山にあるのが春日山城跡である。この城跡は、東側から延びる丘陵全体に築かれ、東西約 160 m、南北約 130 mを測る。主郭は尾根の屈曲するところに設けた大きな堀切を挟んで西郭と東郭からなり、東郭はその東端を堀切と土塁で尾根を遮断し南北に帯郭を配置している。西郭は南北に長く、北側は小区画と横堀、西側から南側にかけて数段の帯郭で防御を固めている。春日山城跡は四周の土塁を設けた伊賀地域に多い方形城館ではなく、横堀や竪堀で要所を固めるなど縄張りには新しい要素が見られる。

この城は春日神社の神域に築かれていることから、春日神社の宮座を紐帯とする土豪層によって築かれたとされていて、その時期はこの地域に緊張状態がもたらされた天正９年（1581）の織田信長伊賀国侵攻に備えて築城された可能性が指摘されている（12）。

一方、伊賀の中世城館にはない要素が見られるのが、伊賀市下神戸・枡川に所在する丸山城跡である。東西 400 m、南北 450 mの伊賀地域の中世城館としては最大級の規模を誇り、丘陵全体に大小の郭を配置している（図６）。

丸山城跡の主郭は、地形に即した台形状を呈し土塁で囲む平面形とはなっていない。主

郭の南西側には、南北に付櫓状の張り出しのある独立した天守台がある。天守台の石材の大半は失われているが、付近にある大量に残る栗石が石垣の存在を示している。主郭の南側は桝形虎口を採用していることや、随所に横矢掛り意識した屈曲が見られるなど、伊賀地域の典型的な城館にない特徴を有する。近世に編さんされた『勢州軍記』によれば、丸山城跡は天正９年（1581）の織田軍の伊賀国侵攻後、織田信雄の家臣滝川三郎兵衛に与えられたとあり、滝川は天正 11 年（1583）以後も在国していることから、城の整備の時期はこの頃と思われる。

また、伝統的な方形城館を主郭としながらも、石垣や礎石建物を窺わせる遺構が見られるのが伊賀市柘植町所在の福地城跡である。城跡の規模は、東西約 230 m、南北 150 mで、主郭を中心に比較的広い複数の郭が配置される（図７）。主郭は長辺約 80 mで、現況では南を除く三方に空堀が巡り、西側にある虎口には石垣が見られる。主郭北側の土塁は一部が広くなっていて礎石と思われる平坦な石材があり、土塁の内側に穴蔵状の石組があることから、主郭内から穴蔵を経て建物に入る礎石建物があったことが想定される。主郭の平面が方形を呈するのは伊賀の中世城館の典型的な縄張りであるが、主郭を巡る空堀や虎口の石垣、礎石建物の存在など、伊賀地域には見られない要素が認められる。従来の方形城館を改修して現在見られる姿になったと考えられる。福地城跡は、『勢州軍記』に記載のある、天正９年（1581）の織田軍の伊賀国侵攻後、織田信雄の家臣池尻平左衛門が与えられた「柘植の城」に比定できる。

註

（１）三重県教育委員会編 1976『三重の中世城館』
（２）伊賀中世城館調査会編 1997『伊賀の中世城館』
（３）山本雅靖 1984「伊賀における中世城館の形態とその問題」『古代学研究』27 元興寺文化財研究所
（４）駒田利治 1987「伊賀の中世城館跡―発掘調査事例の検討―」『菊永氏城跡発掘調査報告』阿山町教育委員会・阿山町遺跡調査会
（５）森川常厚 1995「伊賀地域中世城館の郭内区画と遺構配置」『研究紀要』第四号 三重県埋蔵文化財センター
（６）福井健二 1997「伊賀の中世城館解説」『伊賀の中世城館』伊賀中世城館調査会
（７）三重県埋蔵文化財センター 1993「箕升氏館跡（北城遺跡）」『伊賀国府跡・箕升氏館跡ほか』
（８）阿山町教育委員会，阿山町遺跡調査会 1987『菊永氏城跡発掘調査報告』
（９）伊藤裕偉 2011「第４節　モノから見た地域の交流」『伊賀市史』第１巻通史編古代・中世，伊賀市
(10) 井上喜久男 1987「伊賀地方出土の中・近世陶磁について」『菊永氏城跡発掘調査報告』阿山町教育委員会，阿山町遺跡調査会
(11) 笠井賢治 2021「伊賀惣国一揆と信長」『織田政権と本能寺の変』塙書房
(12) 寺岡光三 1995「伊賀町川東の春日山城について」『研究紀要』第四号 三重県埋蔵文化財センター

図１　伊賀市川東地区中世城館分布図

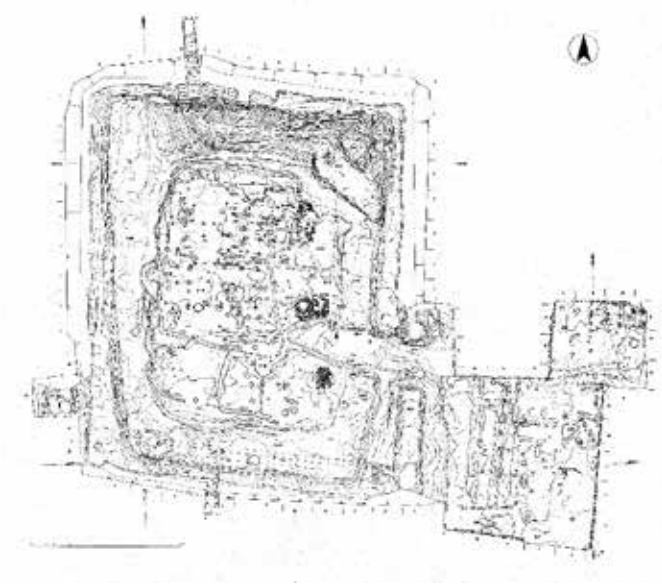


図２　箕升氏館跡遺構図

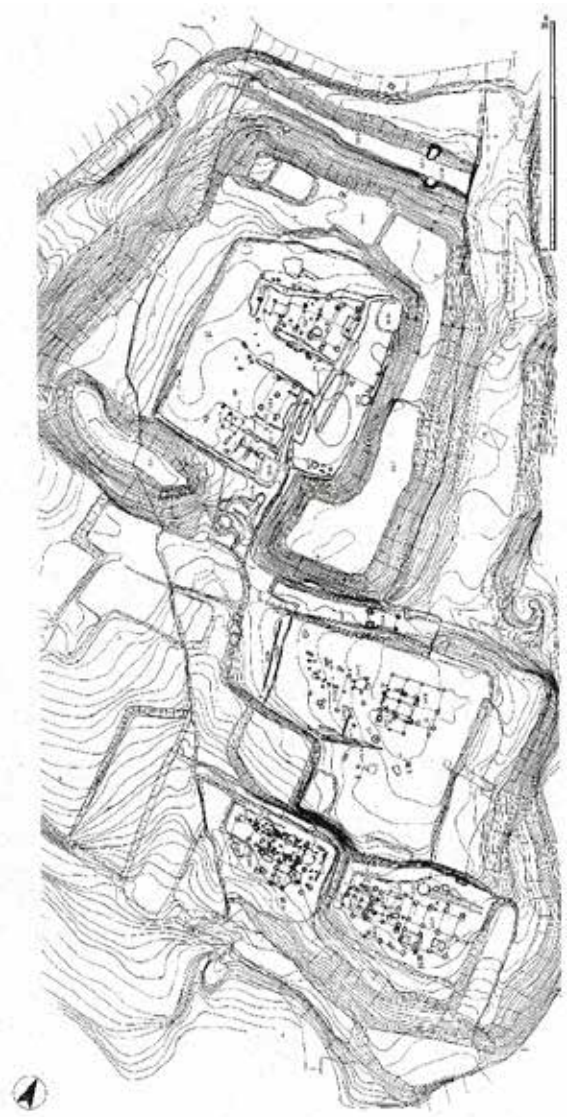


図３　菊永氏城跡遺構図

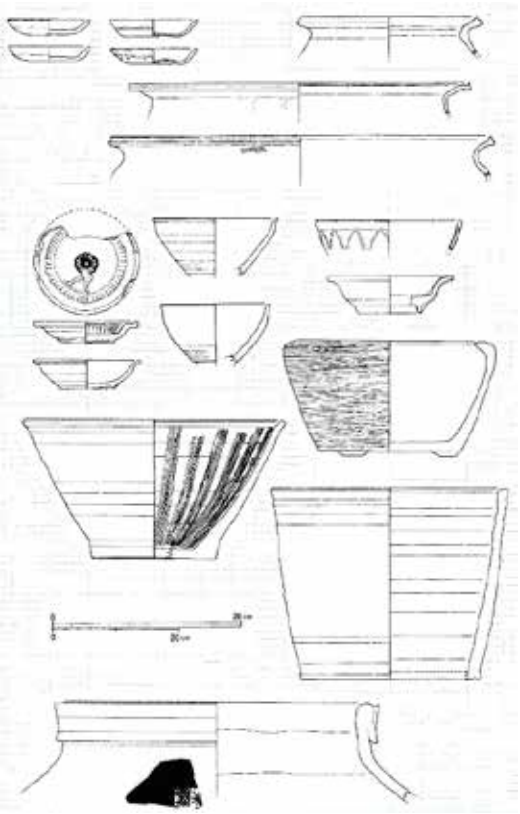


図４　箕升氏館跡出土遺物図

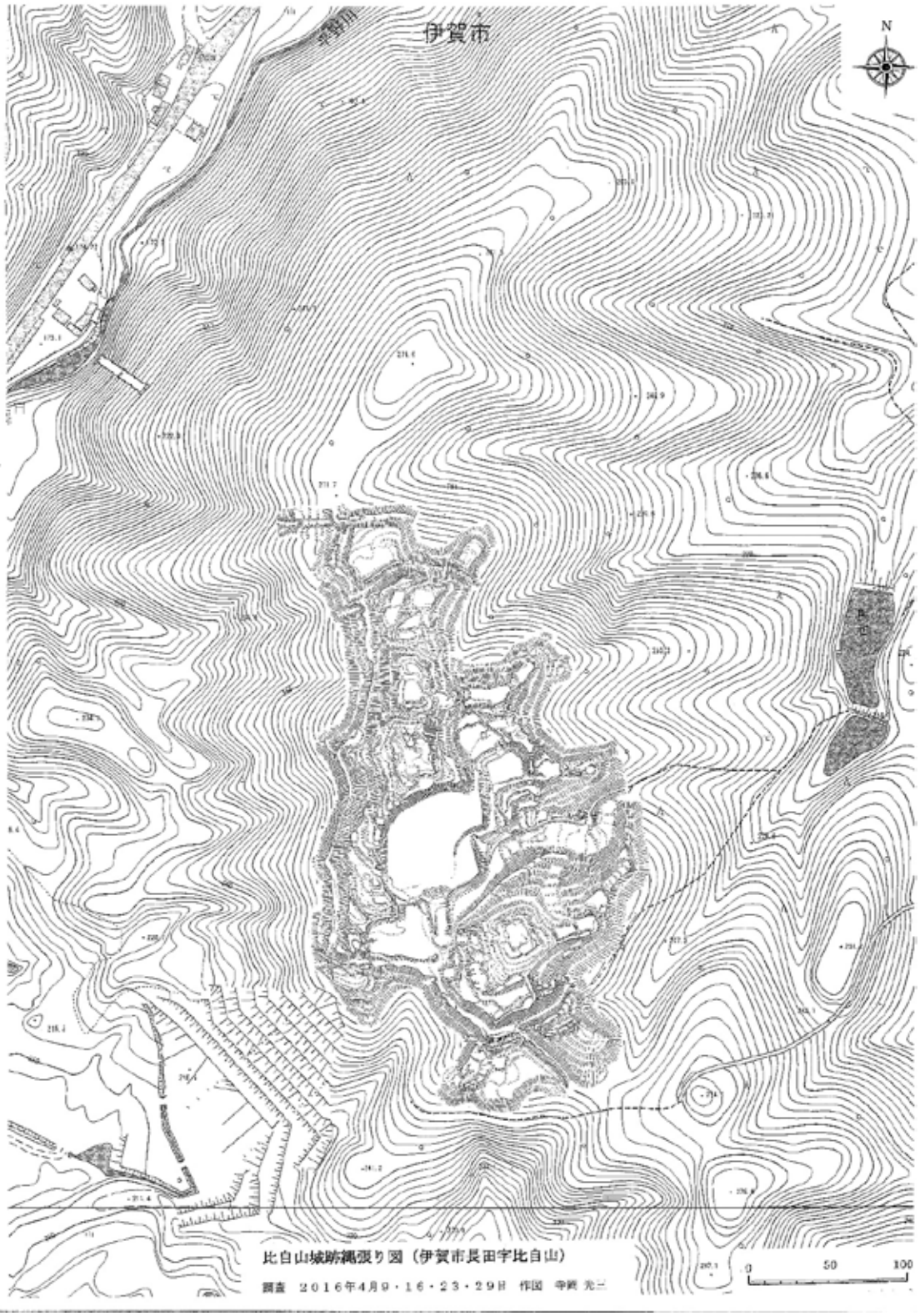

伊賀市
N
比自山城跡縄張り図（伊賀市長田字比自山）
調査　2016年4月9・16・23・29日　作図　寺岡 光二
0
50
100

図５　比自山城跡縄張図

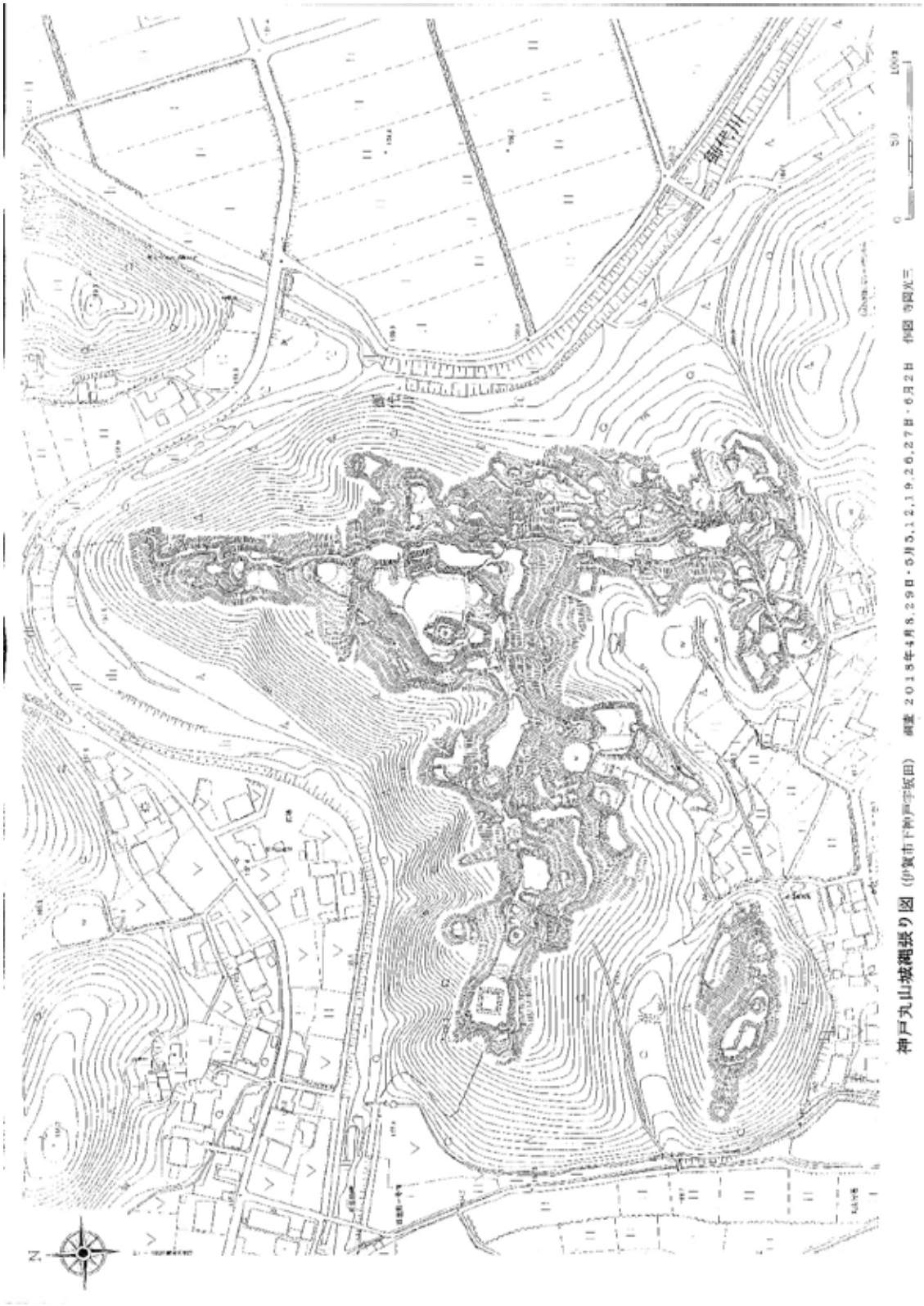

神戸丸山城縄張り図（伊賀市下柏戸字坂田）　調査　２０１８年４月８，２９日・５月５，１２，１９，２６，２７日・６月２日　作図　寺岡光三
御代川
N

図６　丸山城跡縄張図

図７　福地城跡測量図

乙訓の城

大山崎町歴史資料館
福島克彦

はじめに

全国の城跡の大半が村落に付随した城館や山城→守護や織豊権力に収斂されない方向
村落に住む武士　土豪、村落領主の城の比較から地域社会を考える。
伊賀・甲賀、山城国乙訓は重要なの素材となる場所

1、戦国期の中間層と城館跡

(1) 土豪（村落領主・地侍）の捉え方

伊賀惣国一揆・甲賀郡中惣　土豪（村落領主・地侍）による横の結合（一揆）
・村田修三氏　小領主（加地子得分を持つ名主層）が横に連合
用水、地域枡、城館などから村落住民から登場した存在。
・久留島典子氏　山中氏は中世前期から伊勢神宮柏木御厨地頭職に補任され、鈴鹿峠警固役の伝統的な職を継承してきた領主である。政治的にも摂津欠郡等で一族が活躍（石田晴男氏）

(2) 城館の研究史

村田修三氏　伊賀・甲賀の土塁・堀を廻らす特徴。「館城」という概念
千田嘉博氏　近江国を素材に5つのモデルの提示（集落との関わり）
中井均氏　発掘調査による集落遺構と城館の位置（考古学の可能性）
中西裕樹氏　摂津・河内などの山城事例／そもそも平地の城がない？
→甲賀・伊賀の事例が一般化できるか？
甲賀・伊賀の研究史を批判的に継承する必要性（学びつつも相対化）

2、乙訓・西岡の事例

(1) 乙訓郡と西岡

乙訓郡　現在の向日市、長岡京市、大山崎町、京都市西京区
西岡　現在の向日市、長岡京市、大山崎町の円明寺、下植野、京都市西京区、南区のうち、桂川右岸（大山崎町の字大山崎は入らない）
→ここでは両者を合わせた区域を対象とする。

(2) 戦国期の乙訓惣国

15世紀後半　向日社を中心に結合、守護不入権の指向
小野景行・鶏冠井雅盛・竹田長重・物集女光重・平康弘・神足友善ら土豪による横の連携
→伊賀惣国一揆･甲賀郡中惣は16世紀後半が盛期。伊賀･甲賀のような掟書が見られない。

(a) 乙訓の集落より郷銭を支払い、細川氏被官の入部を阻止

[史料 1]

細河殿（細川政元）被官上田林ニ給わり西岡中畠山右衛門佐（義就）方ヱ出者跡闕所之事、去年文明十八丙丁年、入部をなすと企てる之処、事を行わず、当年国衆より屋形ヱ申し安堵と成す、其礼銭過分ニ入る之間、諸郷より郷出銭これあり

（「鎮守八幡宮供僧評定引付」長享元年閏 11 月 18 日『東寺百合文書』ね）

[史料 2]

郷々出銭之事、御本所へ御申すの処、御承引無く之由承り候、此等題目は必々申し達するべくに非ざるといえども、惣国大儀之事候間、御合力の事、寺社本所へ悉く申し候

（長享元年閏 11 月 3 日付「神足友善他 5 名連署状」『東寺百合文書』を）

(b) 山城国守護代香西元長（嵐山城に居住、細川京兆家内衆）による課税・人夫役

[史料 3]

香西又六（元長）申す城州河北愛宕・宇治・紀伊・葛野・乙訓五郡の内寺社本所領幷在々所々年貢・諸公事物等五分の一の事、これを知行致すべし、同じく人夫に於いては召し仕るべくの旨、又六に対し奉書ならせられ訖んぬ

（明応 7 年 2 月 1 日付、「乙訓郡内国人中、郡内名主沙汰人中宛、細川政元奉行人飯尾家兼奉書」『東寺百合文書』リ）

[史料 4]

乙訓郡之面々朝暮談合致し、当郡ぉ国持ニ侘事仕り候て

（< 明応 7 年 >11 月 24 日付「上久世荘公文寒川家光書状」）

[史料 5]

向日宮に於いて国之寄合候之間（< 明応 7 年 >11 月 27 日付「上久世荘公文寒川家光書状」）

[史料 6]

仍って去んぬる廿八日向日宮に於いて国の寄り合い候、乙訓郡之内寺社本所之事、当年計礼物を以って、五分一ヲ侘事を致すべくの由候、然る候ば寺家之儀、何々の如く御沙汰あるべく候哉、明日朔日鶏冠井在所ニて諸本所之返事聞くべく之由候而、国之衆参会候間、急度申しせしめ候、一途承り候て、其覚悟成るべく候、国次ニはつれ一味之儀御沙汰無く候ば、五分一之催促仕るべく候、先日注進申すと只今之儀相違之様ニ思し召されるべく候、国之儀廿八日之談合違い候間、重ねて注進申し候、恐々謹言、

公文

十一月晦日　　家光（花押）

公文所御坊

（寒川家光書状『東寺百合文書』を）

3、乙訓・西岡の中世城館

(1) 城の分布（図 1）

山城、丘陵上の城が希薄、基本的に平地城館

嵐山城跡（香西元長）、峰ヶ堂城跡（木沢長政）、山崎城跡（細川晴元、羽柴秀吉）→外部勢力

伊賀・甲賀と並ぶ、土豪の惣結合が城館跡として体現した地域である（中井均氏）。

(2) 城館の様相

①革嶋城跡（京都市西京区）

革嶋氏　近衛家領革嶋南荘下司職、室町幕府御家人、丹後栗田（宮津市）にも一族
　　近世期も牢人として城跡に居住する。

嘉暦元年（1326）の「革嶋南庄差図」（『革嶋家文書』）（図 2）

革嶋氏屋敷図（元禄 15 年〈1702〉）（図 4、図 5）

「御所カキ内」（政所屋敷）と革嶋氏館跡の立地が重複する。産土社の三宮神社（図 3）

江戸時代に近衛氏の「御下屋敷」と称する。

東側に桂川の基幹用水、傍にあっても関心がない。堀の水は排水路と接続。

発掘調査によって 15 ～ 16 世紀の土塁･堀が確認される。土塁内側にも堀を検出（図 6）。

②物集女城跡（図 7　向日市）

物集女氏の城館跡。堀・土塁を四周させる遺構。東辺と北辺に土塁・堀が残存する。

扇状地の先端に位置し、傾斜があるため東辺のみ滞水する。

土塁の構築（16 世紀前半～）、西外郭に細かい区画あり。15 ～ 16 世紀。

虎口（開口部）が不明→主郭における位置　西辺、南辺に絞られる。

城の南西方向に天龍寺系列の寺院があり。暦応 3 年（1340）より天龍寺領物集女荘。

物集女氏　荘官的立場。

③開田城跡（図 8　　長岡京市）

中小路氏の居館跡。80m 四方に堀と土塁が廻る。15 ～ 16 世紀の遺物が出土した。段丘から低くなる南西隅に開口部がある。中央部に建物跡が確認されている。

④神足城跡（図 9　長岡京市）

神足氏の城館跡。「乙訓郡条里坪付図」には「こうたにしろ」と記されている。これによれば現在の神足神社周辺にあったと考えられる。16 世紀初頭と考えられる「勝龍寺近隣絵図」『九条家文書』には四方に堀を廻らせた居館跡が描かれている。香西元能が九条家領小塩荘の代官として当城に入部したが、九条家方は直務支配を目指すため、九条政基らが入城を図った。これに対して香西方は、これに抵抗している。これは当施設が九条家領小塩荘の政所屋敷的側面があったことを示す。

⑤下海印寺遺跡（図 10　長岡京市）

小泉川左岸に位置する 50 m四方の居館跡。堀の内側に柵が取り巻く。西辺中央部に土橋

があり、門遺構と対応する。11 世紀末～ 12 世紀後半。江戸時代は阿弥陀寺が建立される。

⑥石見城跡（図 11、図 12　京都市西京区）

石見集落の低い段丘上に横矢遺構が残存する。城跡の西側の区画にⅠ期（12 世紀末～ 13 世紀前半）、Ⅱ期（14 世紀後半～ 15 世紀初頭）、Ⅲ期（16 世紀前半）の三時期の集落遺構。城跡の東西堀は旧堀（13 世紀）、新堀（15 世紀）が確認された。

以上の点から、13 世紀から 15 世紀にかけて、ほぼ同一区域に堀を伴う施設があったことが確認された。

⑦勝龍寺城跡（図 13　長岡京市）

主郭部、外郭線は 16 世紀後半の細川藤孝の時期に構築。応仁文明の乱時は西軍の畠山義就が入ったが、それ以降乙訓・西岡地域の拠点的城郭である。江戸時代の絵図や地籍図によれば、主郭の北側に区画が看取され、藤孝が入る以前は方形区画が集まった遺構と考えられる。堀や土塁の規模は、他の平地城館を凌駕するが、方形プランが基本となる。

(3) 中世前期からの連続性

近畿地方では中世前期の方形館遺構が各地で確認されている。中世後期の遺構との連続性・非連続性、あるいは移転などの視点が有効になると思われる。

4、比較検討

(1) 館城の成立時期と一揆

a 伊賀の城

15 世紀後半～ 16 世紀前半から成立、存在　田村昌宏氏

b 甲賀の城

貴生川遺跡　13 世紀前半から半ば、16 世紀後半　近隣に二つの居館跡（土塁あり）

→ 16 世紀後半から 17 世紀前半までの土塁・堀を廻る平地居館跡に隣接して、13 世紀前半から半ばの「土塁状の構造物」と溝によって囲まれる方形館が確認された。

16 世紀中後期を盛期とする伊賀惣国一揆、甲賀郡中惣より先んじて館城の形態が定着した可能性→甲賀山中氏　柏木御厨地頭職、鈴鹿峠警固役など、中世前期からの職掌

乙訓の革嶋氏　荘園下司職から政所屋敷に入る。後に居館化していく。

(2) 館城に基づく社会

①伊賀・甲賀を特異とする認識

天正 20 年（1592）加藤清正の証言

［史料 7］

吾郎哈百姓已下之体、守護たる者之無く、<u>むかしの伊賀・甲賀のことくにて、一在所一在所要害を構え之有るに付て、四、五ヵ所成敗せしめ候</u>、茲により、残る所何も明け退き申し候間、放火仕り、先ず打入り申し候事（木下吉隆宛、加藤清正書状『加藤清正文書集』）

→濃密な城館の分布状況、「むかし」をどう捉えるか？

②特殊兵力の存在「伊賀之城取者共」

[史料 8]

龍蔵申されるべく如く、伊賀之城取者共、三鼻出で候、一斗者摂州、一斗者当国（丹波）、一斗者播州へ越す由候、当国へ越候段、必定に於いては、其方か八上か城内を番をなすべく候、いよいよ油断無く御半処、夜候へも昼之出入候へば、下人も態々相改らるべく事専用候、

（永禄 4 年〈1561〉閏 3 月 18 日付、宛名欠、内藤宗勝〈松永長頼、久秀の弟〉書状『畠山義昭所蔵文書』）

→「伊賀之城取者共」が、摂津、播磨、丹波に「三鼻」放たれたため、もし明確になれば、丹波でも八上（丹波篠山市）、八木城（南丹市・亀岡市）のいずれかで、昼夜替わらず人の出入りを確認するよう命じている。（城を取る 「侍」身分「伊賀惣国一揆掟書」5 条目）。

(3) 土豪の移動

西八条西荘公文　福地新左衛門光長

牛瀬村桂地蔵河原用水の事、福地新左衛門尉新儀を構え押し留め条

（15 世紀末）卯月 15 日付「薬師寺元長書状案」『東寺百合文書』ヲ

おわりに

(1) 横軸の議論　　館城、方形プランの分布

(2) 縦軸の議論　　領主制の発展

[参考文献]

天野忠幸編『戦国遺文』三好氏編　3、東京堂出版、2015 年

石田晴男『中世山中氏と甲賀郡中惣』同成社、2021 年

千田嘉博「村の城をめぐる 5 つのモデル」同『織豊系城郭の形成』東京大学出版会、2000 年

玉城玲子「15 世紀後半の乙訓における惣国について」『長岡京古文化論叢』1986 年

田村昌宏「中世城館と惣国一揆」村田修三編『中世城郭研究論集』新人物往来社、1990 年

久留島典子「中世後期在地領主層の一動向」『歴史学研究』497、1981 年

中井均『戦国期城館と西国』高志書院、2021 年

中井均「物集女城跡の歴史的意義」『物集女城跡総合調査報告書』2023 年

中西裕樹「戦国期における地域の城館と守護公権」『新視点中世城郭研究論集』新人物往来社

中西裕樹「摂津西部の山城」『愛城研報告』20、2016 年

福島克彦「戦国期畿内の城館と集落」 新視点中世城郭研究論集　新人物往来社、2002 年、

福島克彦「中世方形館研究の問題点」城館史料学　4　2009 年

福島克彦「中世前期城館研究の問題点と上中城跡」龍谷大学文学部考古学実習調査報告書　1、2021 年

村田修三「地域枡と地域権力」『史林』55-1、1972 年

村田修三「用水支配と小領主連合」『奈良女子大学文学部研究年報』16、1973 年、

村田修三「戦国時代の小領主」『日本史研究』134、1973 年

村田修三「中世の城館」『講座日本技術の社会史』土木 1985 年

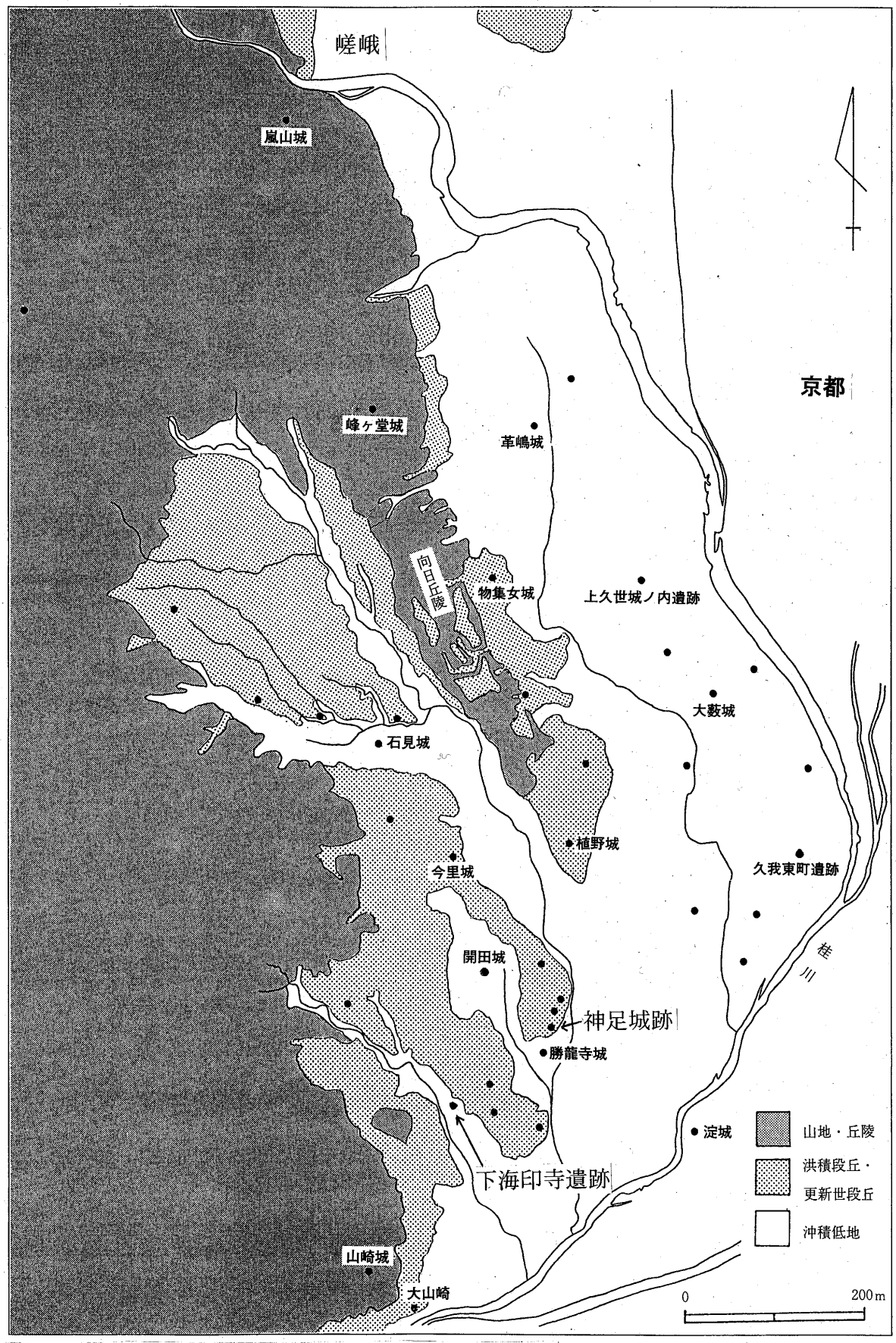
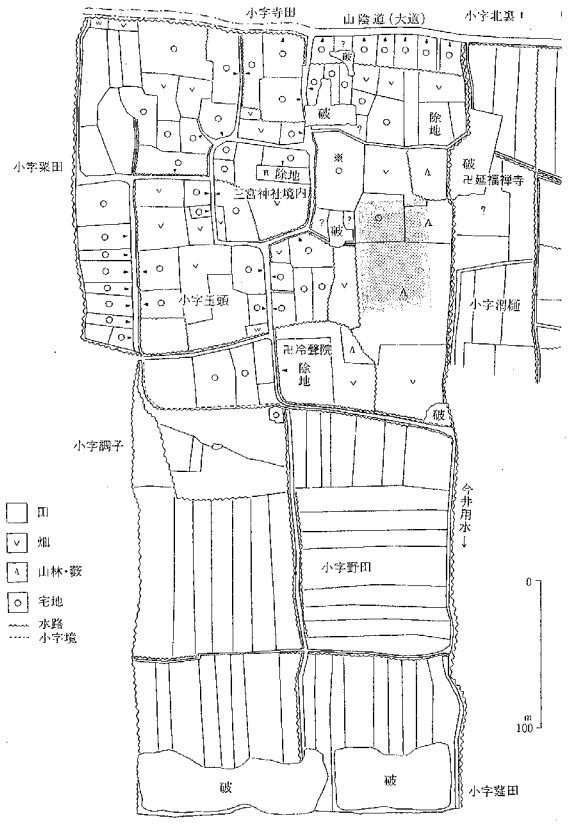
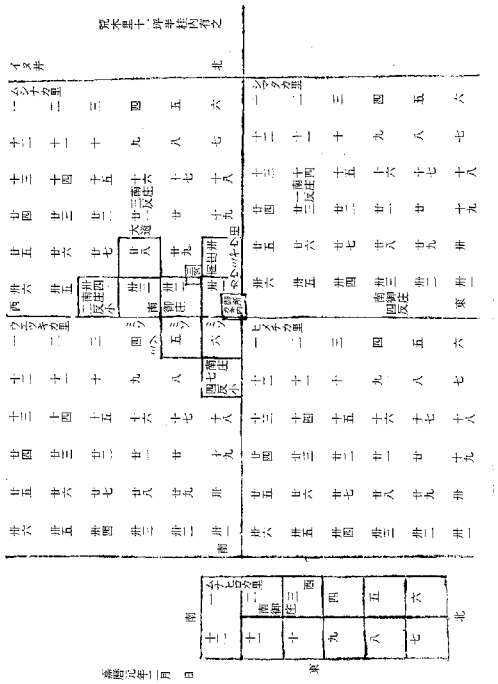


図１　西岡・乙訓郡における中世城館分布
（大山崎町歴史資料館『京都の城、乙訓の城』1998）



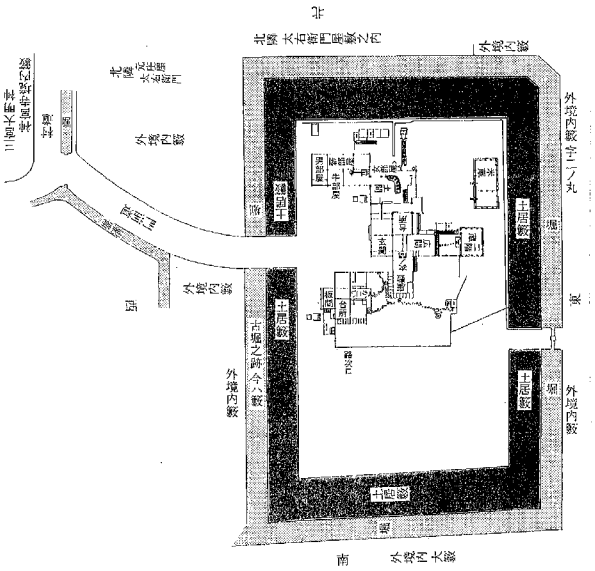
革嶋周辺地籍図（註 59）

図 3　革嶋周辺地籍図



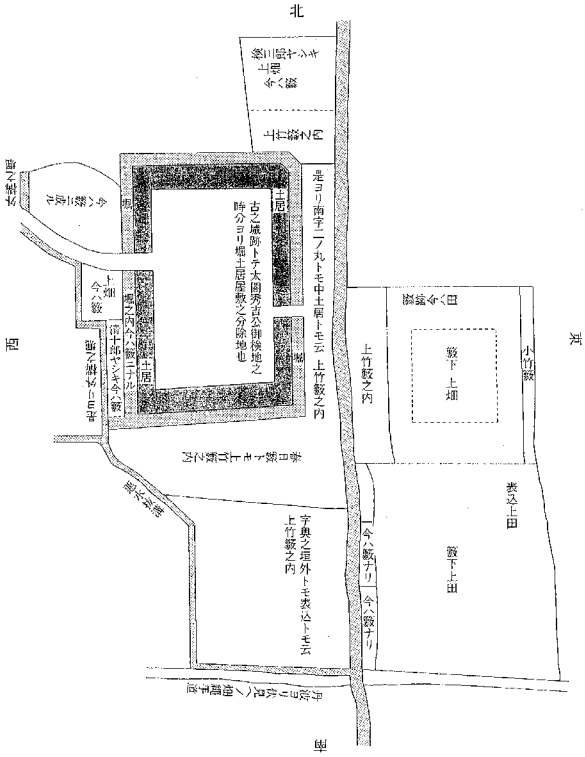
革嶋南庄差図（西が図の上、註 57）

図 2　革嶋南庄差図『革嶋家文書』嘉暦元年(1326)



革嶋氏屋敷絵図（『革』1976、1978。建物内部の情報は一部省略）

図 5　革嶋氏屋敷絵図『革嶋家文書』



革嶋氏屋敷図（西が図の上。『革』1977。題名・面積・石高表記は省略）

図 4　革嶋氏屋敷図『革嶋家文書』元禄 15 年(1702)

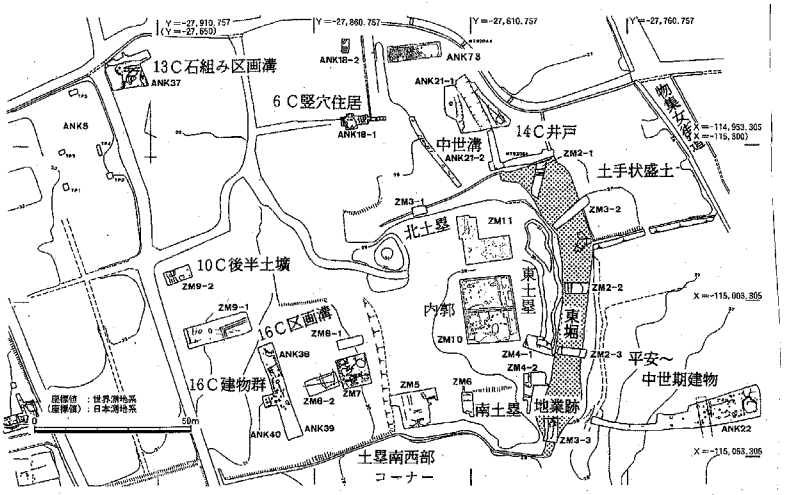


図 7 物集女城跡『物集女城跡総合調査報告書』2023

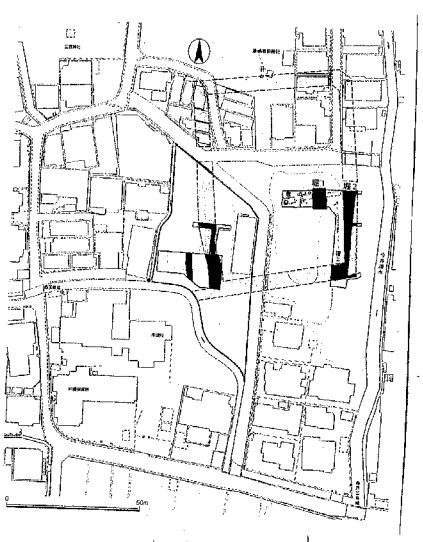
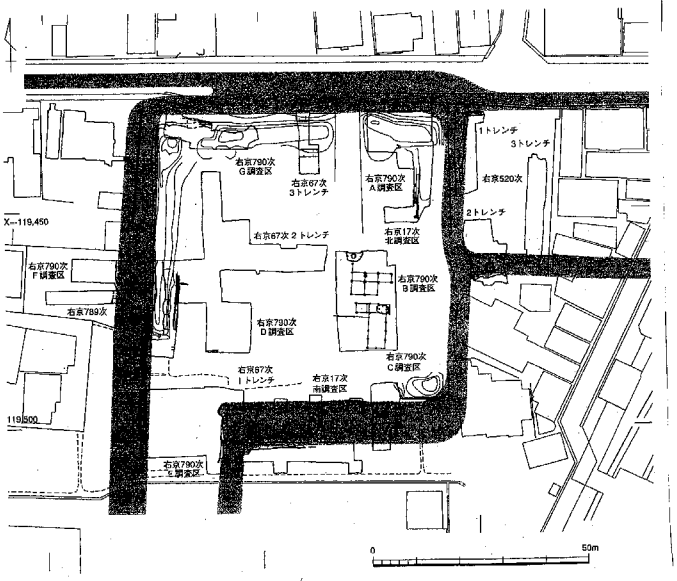


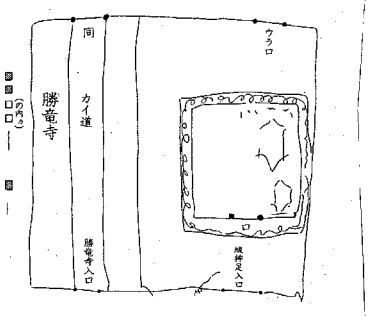
図 6 革嶋城跡 遺構図

『京都府中世城館跡調査報告書』3



開田城跡 A 調査区及び検出遺構配置図

図 8 開田城跡『京都府中世城館跡調査報告書』3



勝龍寺近隣指図（「九条家文書」）正方形区画が神足城（「長岡京市史」資料編（二）より）

図 9 神足城跡『九条家文書』

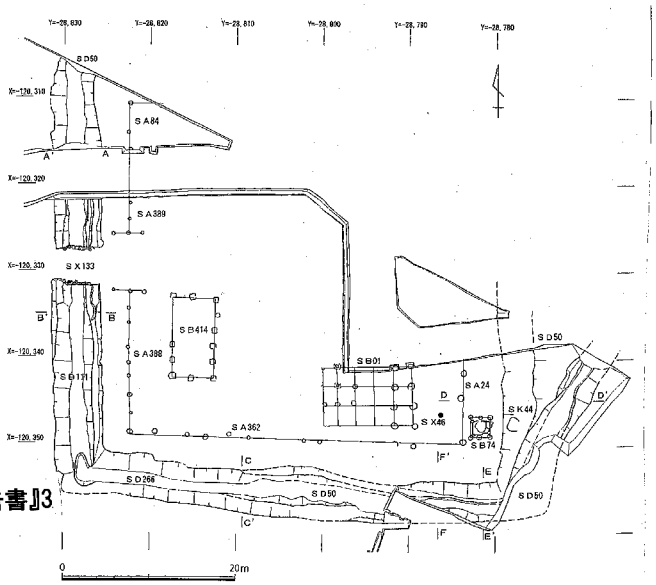


図 10 下海印寺遺跡『京都府中世城館跡調査報告書』3

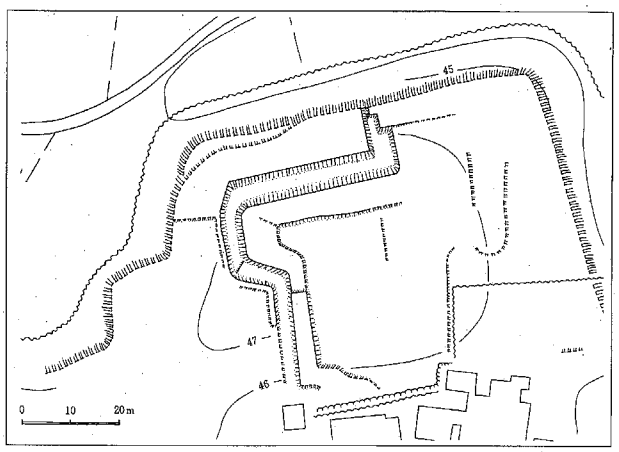


図 11 石見城跡概要図(福島克彦作図 大山崎町歴史資料館『京都の城、乙訓の城』1998)

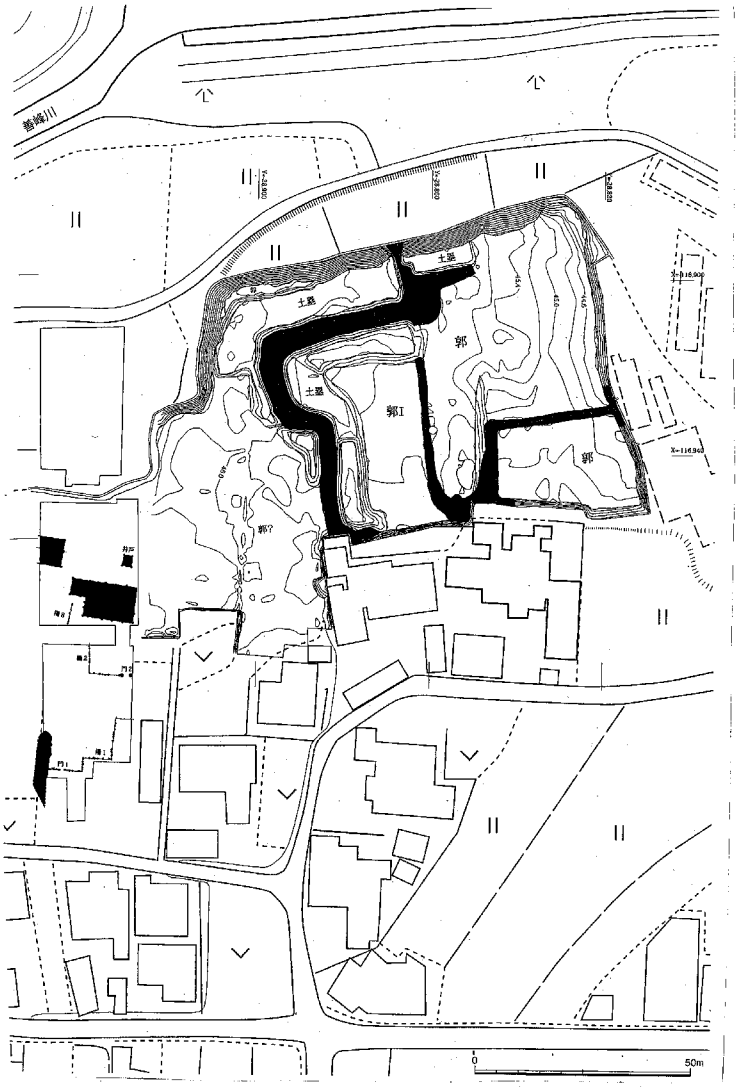


図 12 石見城跡全体図と調査地配置図『京都府中世城館跡調査報告書』3

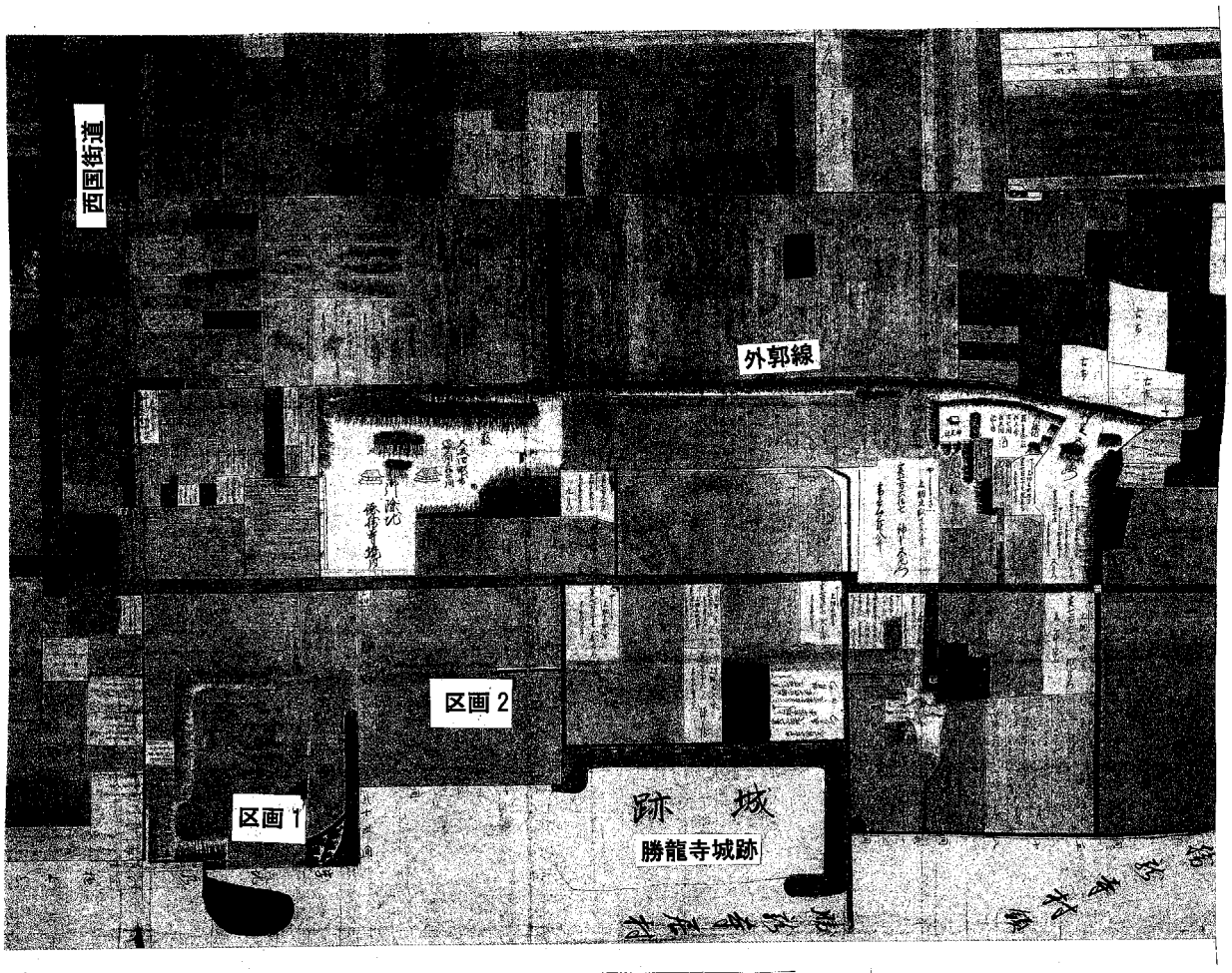


図 13 神足村微細絵図(長谷川家所蔵 宝暦 12 年<1762>)

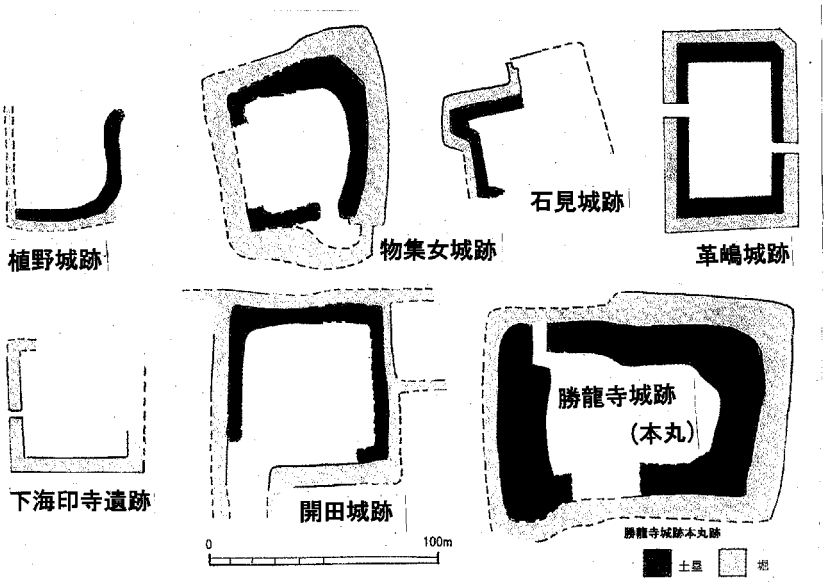


図 14 西岡の平地城館の規模

甲賀の城

甲賀市教育委員会歴史文化財課
主査　伊藤　航貴

はじめに

・甲賀市には 180 箇所を超える城郭があり、その多くが方形を志向する
・築城主体は在地土豪
・発掘調査成果から見た甲賀の城について

１．郡中惣・同名中

・甲賀郡の国人・土豪は、それぞれ総領家（嫡子の継いだ家）を中心に「同名中」と呼ばれる同族集団を組織した。
・一族の総領家と庶子家（分家）だけではなく、血縁関係のない近隣の他家の土豪も含まれていた。→総領家と庶子家は比較的平等な関係。
・同名中の初見は、延徳４年（1492 年）「山中一家中・同名諸氏連署状案」『山中文書』→同名中は 15 世紀末には組織されていた。
・郡中惣とは、国人・同名中が連合した広域の組織、外部からの脅威に対し、郡内の国人・土豪が隣接する勢力とともに対応するために組織されたと考えられている。
・郡中惣の初見は、元亀２年（1571 年）「甲賀郡中惣書状」「甲賀郡中惣判状案」『山中文書』→元亀 2 年より前には組織されていた。

２．分布と立地

・甲賀市内約 180 箇所
→杣川流域（甲賀町・甲南町）に多く分布している
平地（集落内）･･･ 比高差がない集落内に立地
（例）大原城、竹中城、貴生川遺跡など
丘陵先端部 ･･･ 集落との比高 10 ～ 30 ｍの丘陵上に立地
（例）下山城、土山城、和田城館群など
丘陵頂部 ･･･ 比高 30 ｍ以上の丘陵頂部に立地
（例）北内貴城、黒川氏城など

３．発掘調査事例

甲賀市内で発掘調査が行われた城跡は、11 箇所ある（表 1)。このうち豊臣秀吉が築城を命じた水口岡山城は、土豪の城ではないため除外している。また、高野城は発掘調査を実施しているが、城に関する遺構や遺物は確認していないため、こちらも除外している。

（1）植城（水口町植）図 1

規模：東西約 350 m×南北約 255 m（内部を 12 ヶ所に区画）

遺構：土塁（基底部）幅 3 m、高さ 3 m、空堀幅約 10 m、深さ 3 m

石列、溝、柱穴

遺物：土師器皿、信楽焼、陶器、磁器

年代：15 世紀頃～ 16 世紀前半

（2）貴生川遺跡（水口町貴生川）図 2・図 3・図 4

規模：半町四方単郭方形　曲輪約 26 m×約 30 m

遺構：堀幅約 6 m、深さ約 2.6 ～ 2.8 m　土塁（基底部）幅 6.5 ～ 8 m

溝、石組井戸等

遺物：信楽焼・瀬戸焼・美濃焼・中国製陶磁器・漆器など

年代：16 世紀後半を中心に機能し、17 世紀前半に廃絶

（3）杣中城（水口町杣中）図 5

規模：半町四方単郭方形　館城タイプ　大部分が破壊されている

遺構：堀（幅推定 9 m）

遺物：土師器皿、信楽焼、瀬戸美濃系、天目茶碗など

年代：13 世紀～ 17 世紀代

（4）補陀洛寺城（甲賀町大原市場）図 6・図 7

規模：半町四方単郭方形

遺構：土塁（基底部）幅約 5 ～ 7 m、高さ 2 ～ 2.5 m

土塁の下層より溝（幅約 2 m、最深部約 0.5 m）を検出

遺物：土師器皿・信楽焼

年代：16 世紀中～後半頃に築城か？

土塁下の溝からは 16 世紀以前の遺物が出土→土塁構築は 16 世紀以降

（5）上野城（甲賀町油日）図 8

規模：標高 246 m、比高差 29 mの丘陵上に立地

曲輪Ⅰ（主郭）を頂点に 7 つの曲輪

遺構：小穴、土坑など

遺物：信楽焼、美濃焼、唐津焼などの陶磁器類、石臼、砥石など

年代：16 世紀後半から 17 世紀前半

（6）青木城 東城館（甲賀町滝）図 9

規模：曲輪Ⅱ東西 40 m、南北 90 m、曲輪Ⅲ東西 40 m、南北 20 m

遺構：曲輪、土塁、虎口

遺物：信楽焼、土製品、金属製品など

年代：16 世紀後半

（7）市原Ⅱ城（甲南町市原）図 10

規模：単郭方形城館（一辺約 60 m）

遺構：土塁幅 5 m、高さ 1.5 m

遺物：土師器皿、信楽焼など

年代：15 ～ 16 世紀代

（8）竜法師城（甲南町竜法師）図 11・図 12

規模：標高 221 mの丘陵先端部に立地　平地との比高差約 30 m

遺構：土坑等

遺物：信楽焼（曲輪Ⅰ内埋土）、土師器皿（曲輪Ⅰ東側土塁上）

年代：16 世紀後半

（9）小川城（信楽町小川）図 13

規模：標高 470 m通称「城山」に立地、曲輪Ⅰを中心に東へ 3 曲輪、南西に櫓台

遺構：曲輪Ⅰ内部で東西 11 m、南北 10 mの礎石建物

遺物：土師器皿、瀬戸天目茶碗、輸入陶磁器類、信楽焼など

年代：16 世紀後半

４．発掘調査から見た甲賀の城

平地に築かれた城館

・16 世紀以前の遺物が出土

・13 世紀代の溝で囲まれた屋敷を確認（貴生川遺跡）

・土塁の下で溝を確認→土塁の構築は 16 世紀以降（補陀楽寺城）

丘陵上に築かれた城館

・眺望が良い場所を選んで築城

・16 世紀後半から 17 世紀の遺物が出土する。

・外部からの脅威に対応するために築かれたと考えられる。

16 世紀以前・・・溝で囲まれた居館を中心とした集落

16 世紀後半以降・・・堀と土塁を備えた城へ

おわりに

【参考文献】

甲賀市教育委員会 2014『青木城遺跡第 1 次発掘調査報告書』

甲賀市教育委員会 2016『平成 27 年度市内遺跡発掘調査報告書』

甲賀町教育委員会 1996『補陀楽寺城遺跡発掘調査報告書』

甲南町教育委員会 2004『平成 11 ～ 14 年度甲南町内遺跡発掘調査報告書』

滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会 2006『植城遺跡』

甲賀市教育委員会 2018『貴生川遺跡第 4 次発掘調査報告書』

甲賀市教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会 2017『貴生川遺跡発掘調査報告書』

滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会 2006『竜法師城遺跡・池ノ尻遺跡』
甲賀町教育委員会 1989『上野城跡発掘調査報告書』
甲賀市史編さん委員会 2010『甲賀市史』第 7 巻 甲賀の城

表 1：発掘調査一覧

名称	位置	立地	検出遺構	遺物	年代
植城	水口町植	平地	堀・土塁・溝・柱穴・井戸	土師器、信楽焼ほか陶器、磁器	15世紀頃 ～16世紀前半
貴生川遺跡	水口町貴生川	平地	単郭方形城館 (堀・土塁・溝・井戸ほか)	土師器、信楽焼ほか陶器、磁器	16世紀後半 ～17世紀前半
杣中城	水口町杣中	平地	堀の一部	土師器皿、信楽焼、 瀬戸美濃系天目茶碗など	13世紀～17世紀
補陀楽寺城	甲賀町大原市場	平地	土塁・溝・土坑	土師器、陶器、磁器、瓦	16世紀中～後半頃
上野城	甲賀町油日	丘陵上	小穴、土坑など	信楽焼、美濃焼、唐津焼などの 陶磁器類、石臼、砥石など	16世紀後半 ～17世紀前半
青木城	甲賀町滝	丘陵上	曲輪・土塁・土坑	信楽焼、土製品、金属製品など	16世紀後半
市原Ⅱ城	甲南町市原	平地	土塁・溝	土師器、信楽焼ほか陶器、磁器	15世紀 ～16世紀
竜法師城	甲南町竜法師	丘陵上	曲輪・土塁	信楽焼(曲輪Ⅰ内埋土) 土師器皿(曲輪Ⅰ東側土塁上)	16世紀後半
小川城	信楽町小川	山	礎石建物跡・土塁・石塁	土師器皿、瀬戸天目茶碗、 輸入陶磁器類、信楽焼など	16世紀後半
高野城	甲賀町高野	丘陵上	城館に関わる遺構なし	城館に関わる遺物なし	―
水口岡山城跡	水口町水口	山	石垣、石組溝、石階段など	瓦、陶磁器	天正13(1585) ～慶長5(1600)

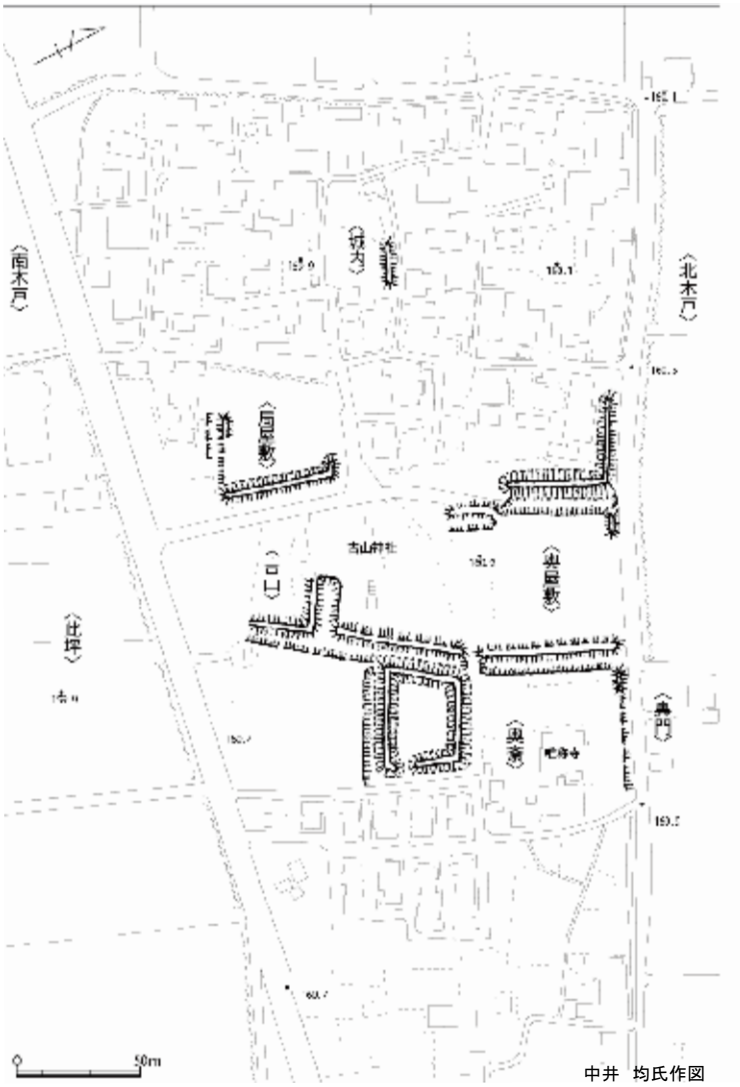


図 1：植城跡概要図（甲賀市史第 7 巻より引用）

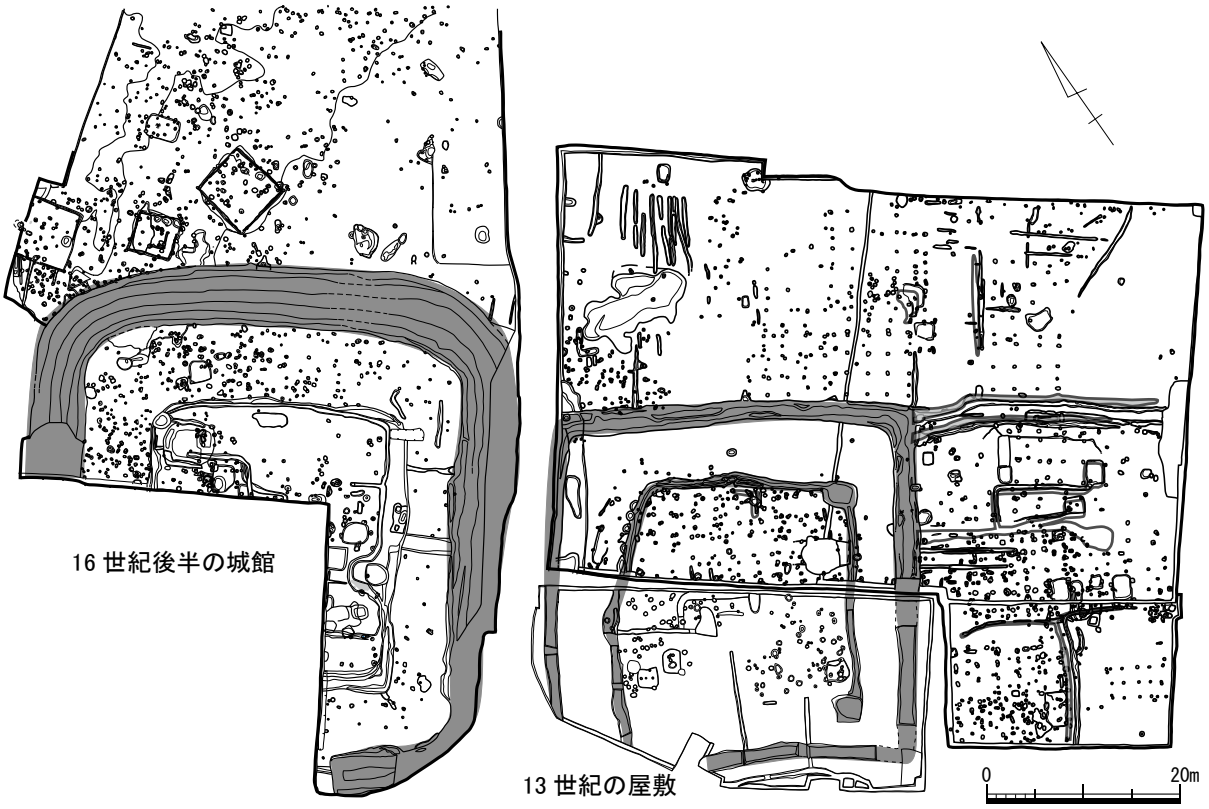


図 2：貴生川遺跡遺構平面図

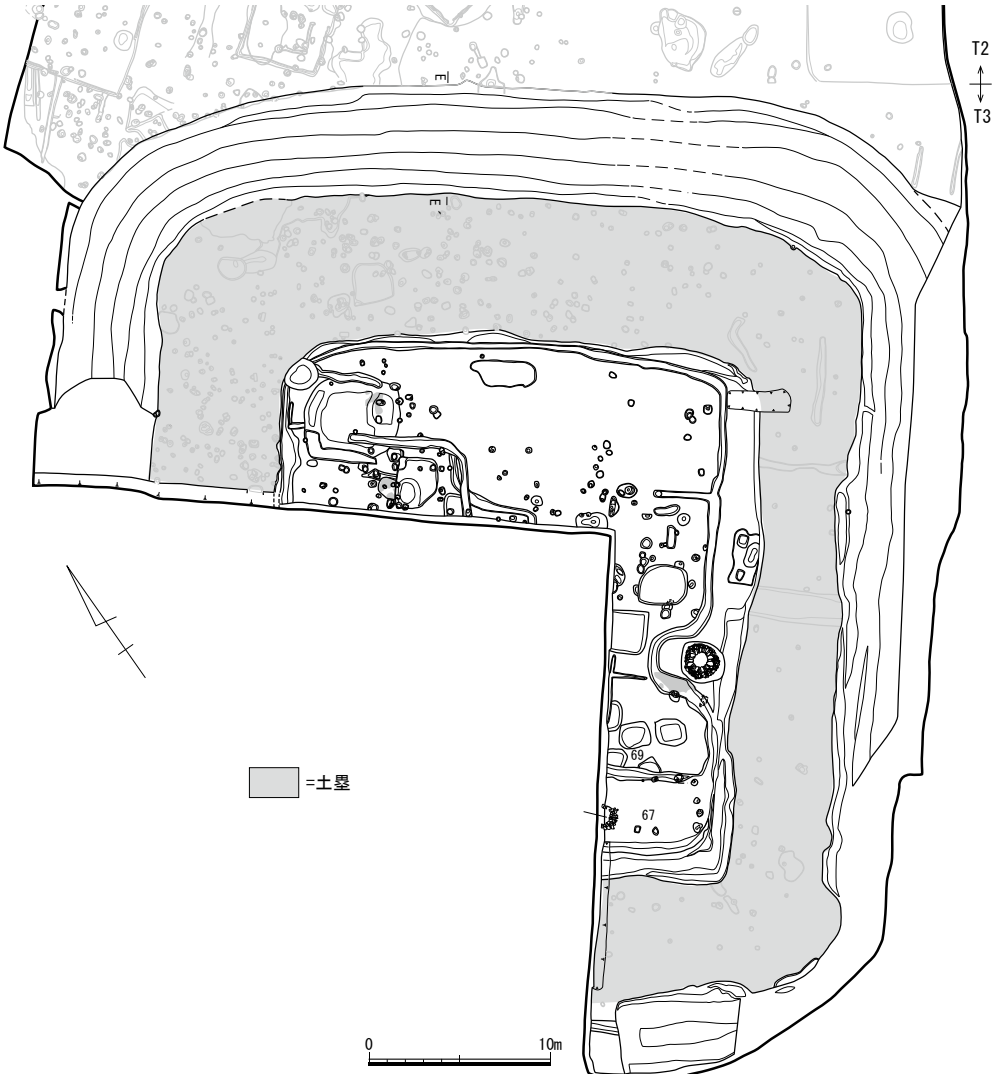
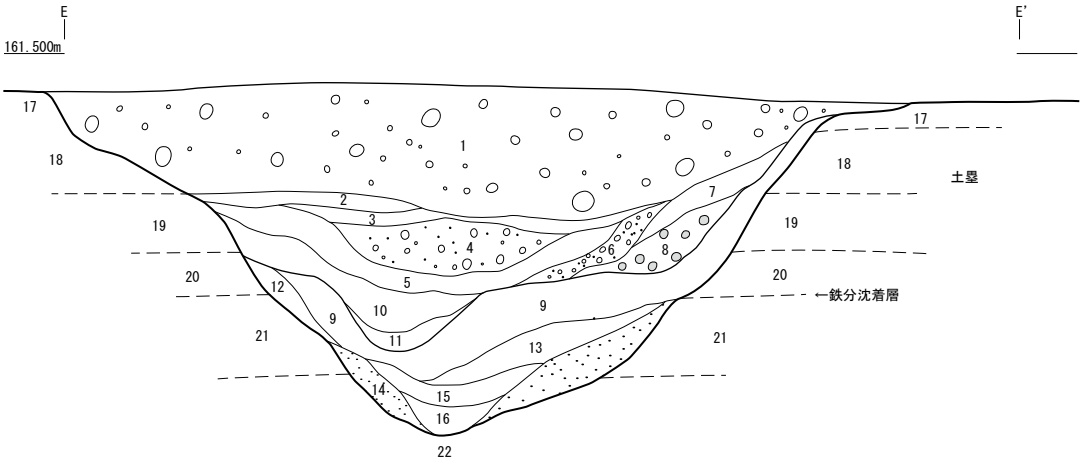


図 3：貴生川遺跡城館跡平面図



1　にぶい黄褐色土(10YR5/3)砂、礫層=造成土
2　灰色粘質土(5Y6/1)砂と少量の礫(1～5cm大)含む
3　灰色粘質土(N6/0)
4　灰色砂質土(5Y6/1)1～5cm大の礫含む
5　緑灰色粘土(7.5GR6/1)
6　灰色土(7.5Y5/1)砂と1～5cm大の小石を多く含む
7　黄褐色土(2.5Y5/3)
8　黄褐色土(2.5Y5/3)+黒褐色土(2.5Y3/1)ブロック混←古墳～中世の包含層 ┐土塁の崩落土
9　黒褐色土(2.5Y3/1)に黄褐色土(2.5Y5/1)が混
10　灰色粘土(7.5Y5/1)
11　灰色粘土(7.5Y4/1)植物遺体を少量含む
12　灰色粘土(7.5Y4/1)
13　オリーブ灰色砂質土(5GY5/1)
14　暗オリーブ灰色粗砂(5GY4/1)3～10cm大の小石混－初期の崩落土(19～20)
15　灰色粘土(10Y4/1)
16　オリーブ黒粘土(10Y3/1)
17　黒褐色土(2.5Y3/1)=古墳～中世の包含層
18　にぶい黄色土(2.5Y6/4)=地山
19　灰色砂礫層(10Y5/1)=地山 1～3cm大の小石
20　暗オリーブ褐色砂礫(2.5Y3/2)=地山 3～10cm大の小石、鉄分沈着
21　灰色砂礫(N5/1)=地山 3～10cm大の小石、鉄分沈着
22　灰色砂礫(N5/1)=地山 10～15cm大の小石、粗砂
23　にぶい黄橙色土(10YR5/4)=後世の撹乱
24　明黄褐色土(10YR6/6)やや砂質、小石混
25　暗灰黄色土(2.5Y4/2)やや砂質、小石混
26　黄灰色粘質土(2.5Y4/1)5～10cm大の礫を多く含む
27　灰色砂質土(5Y5/1)

0　2m

図 4：貴生川遺跡堀跡土層断面図

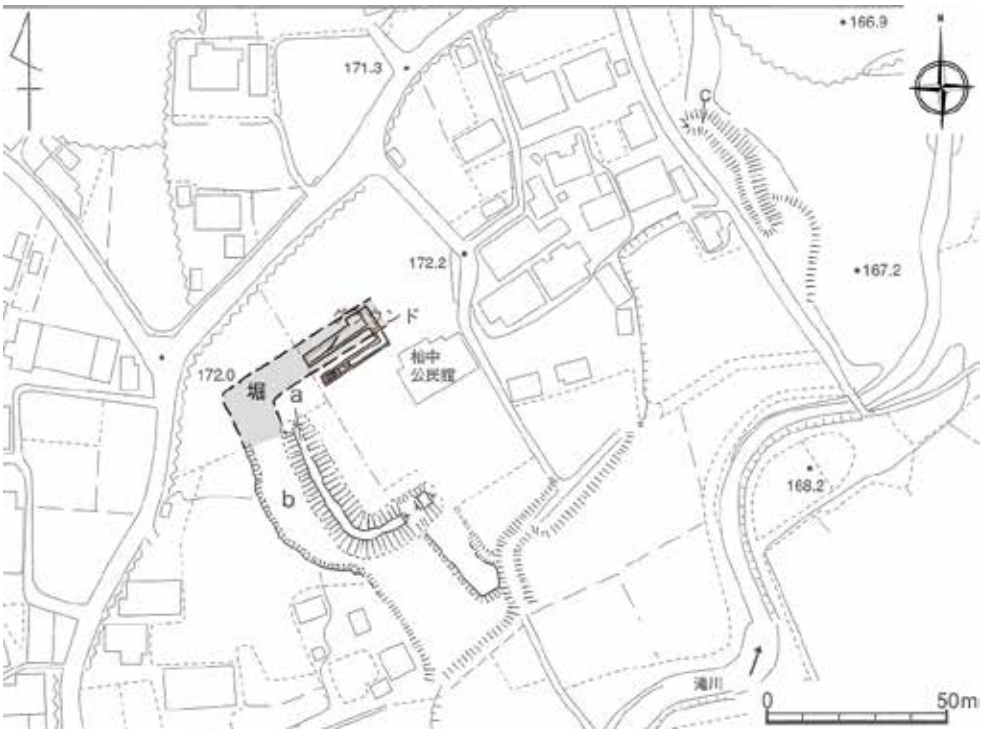


図 5：杣中城跡概要図

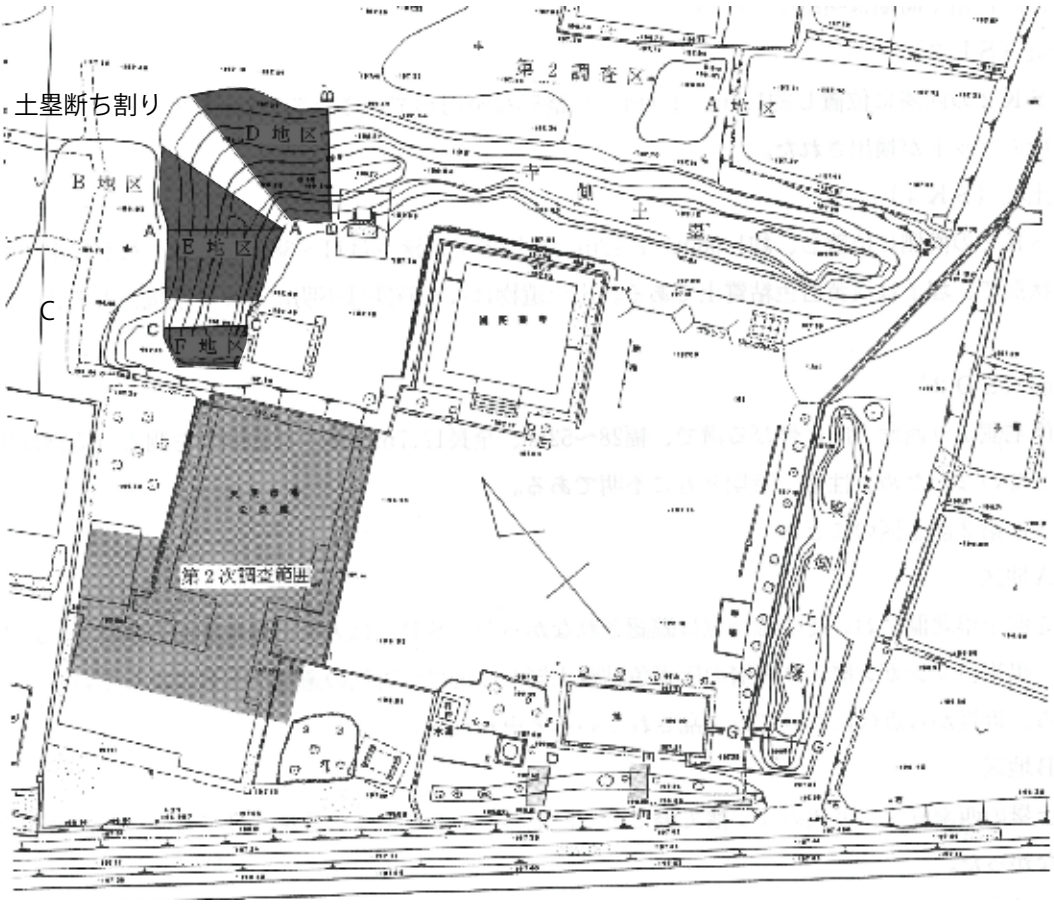


図 6：補陀洛寺城跡調査区位置図

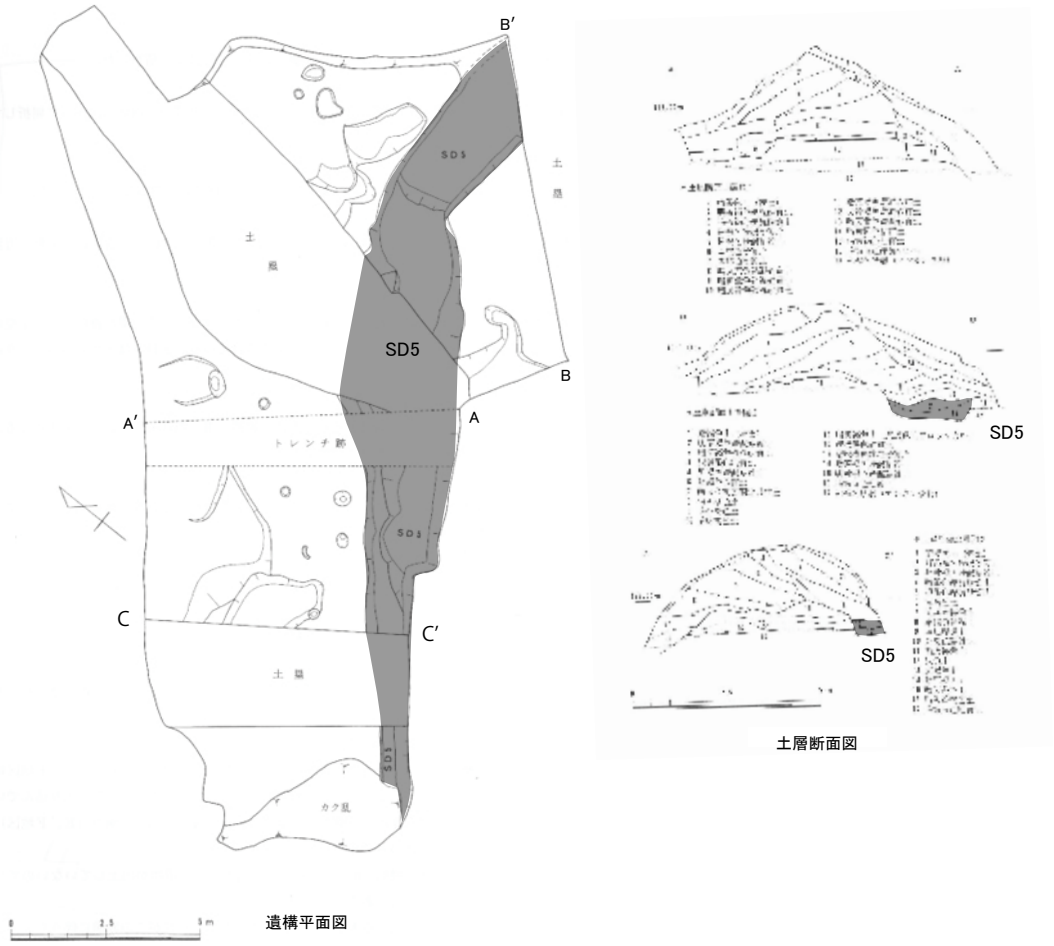


図 7：補陀洛寺城跡平面図・断面図

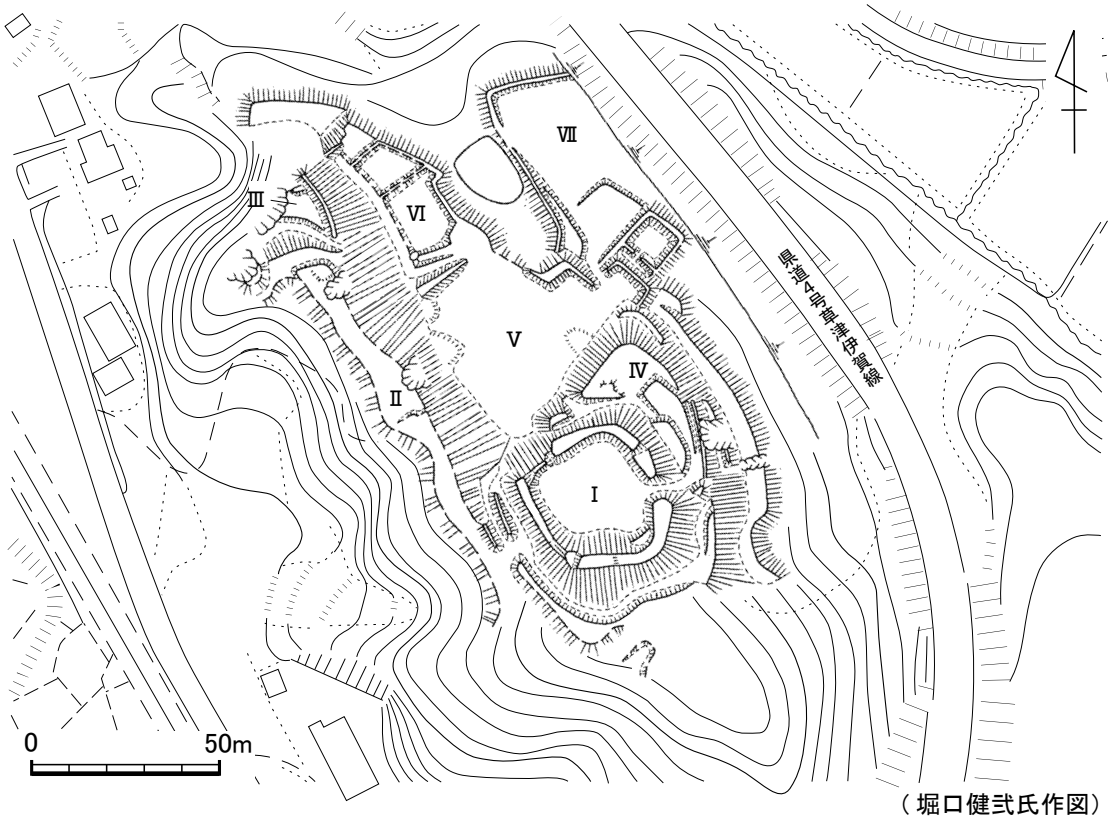


図 8：上野城跡概要図（甲賀市史第 7 巻より引用）

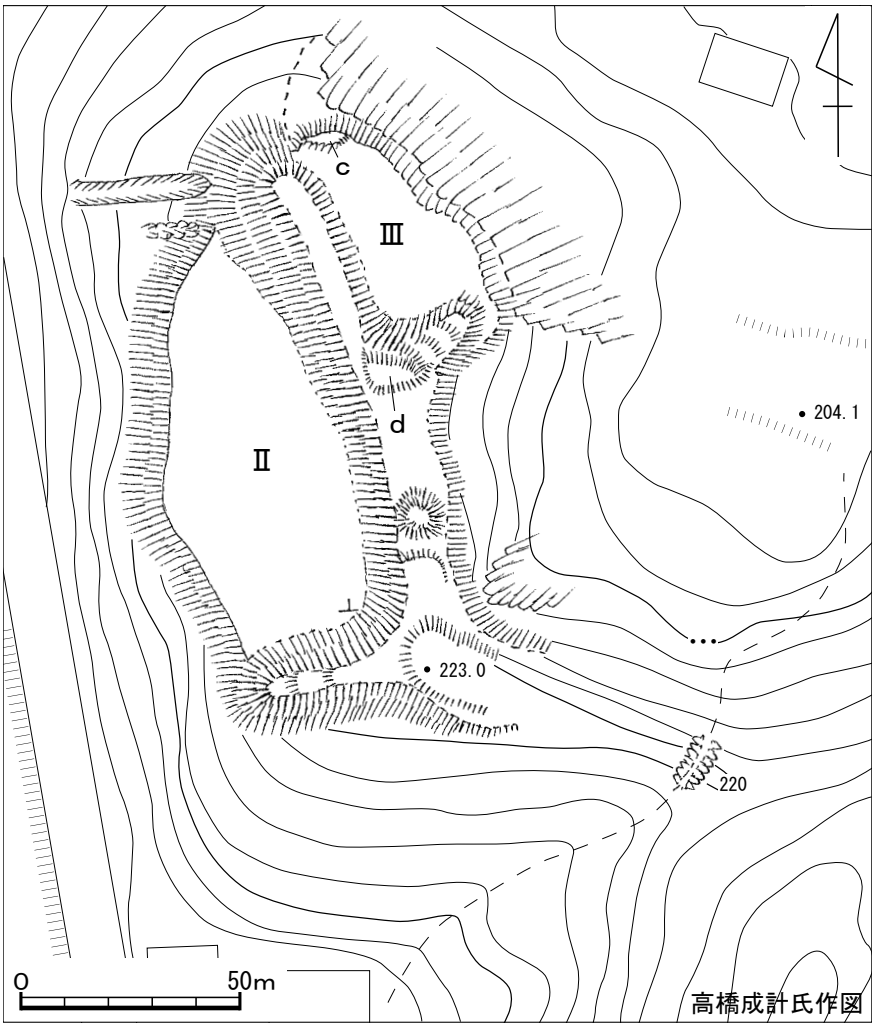


図 9：青木城跡概要図（甲賀市史第 7 巻より引用）

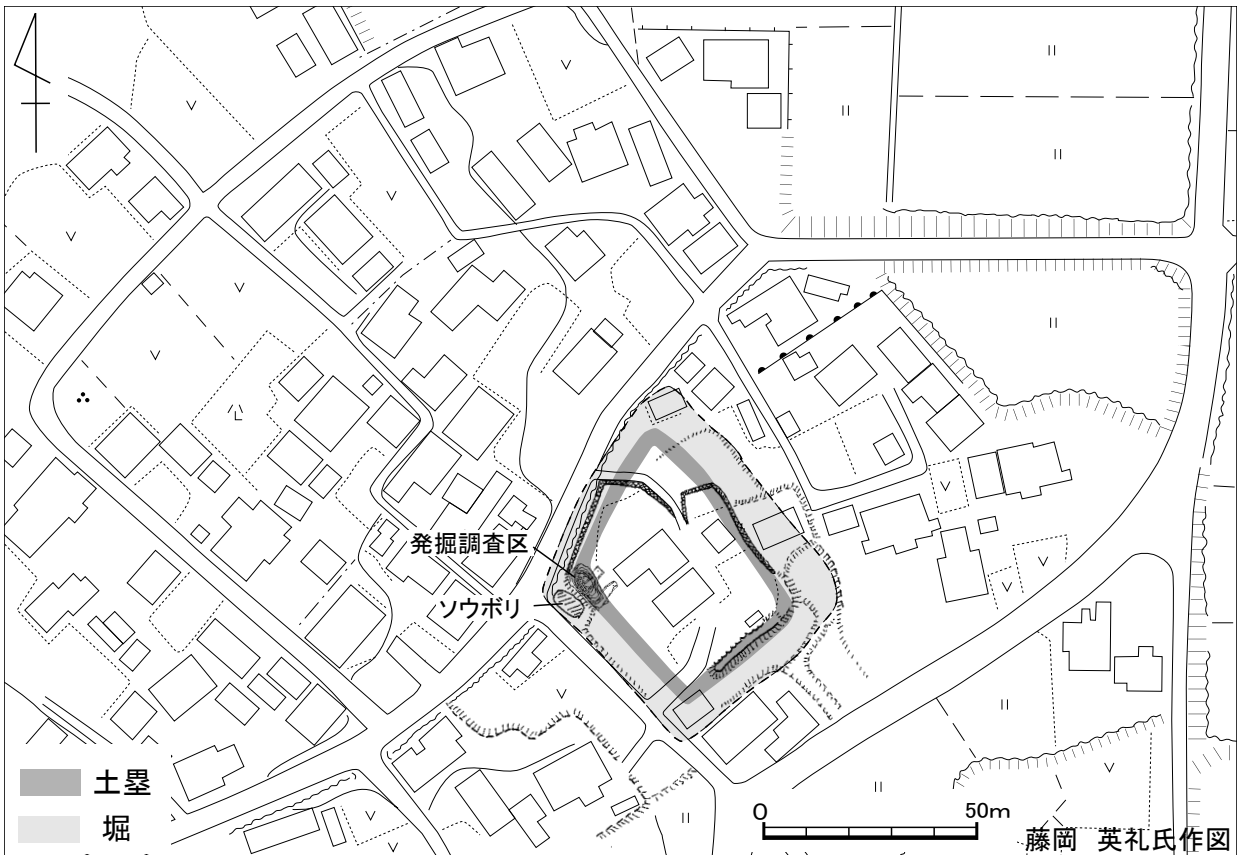


図10:市原Ⅱ城跡概要図（甲賀市史第7巻より引用）

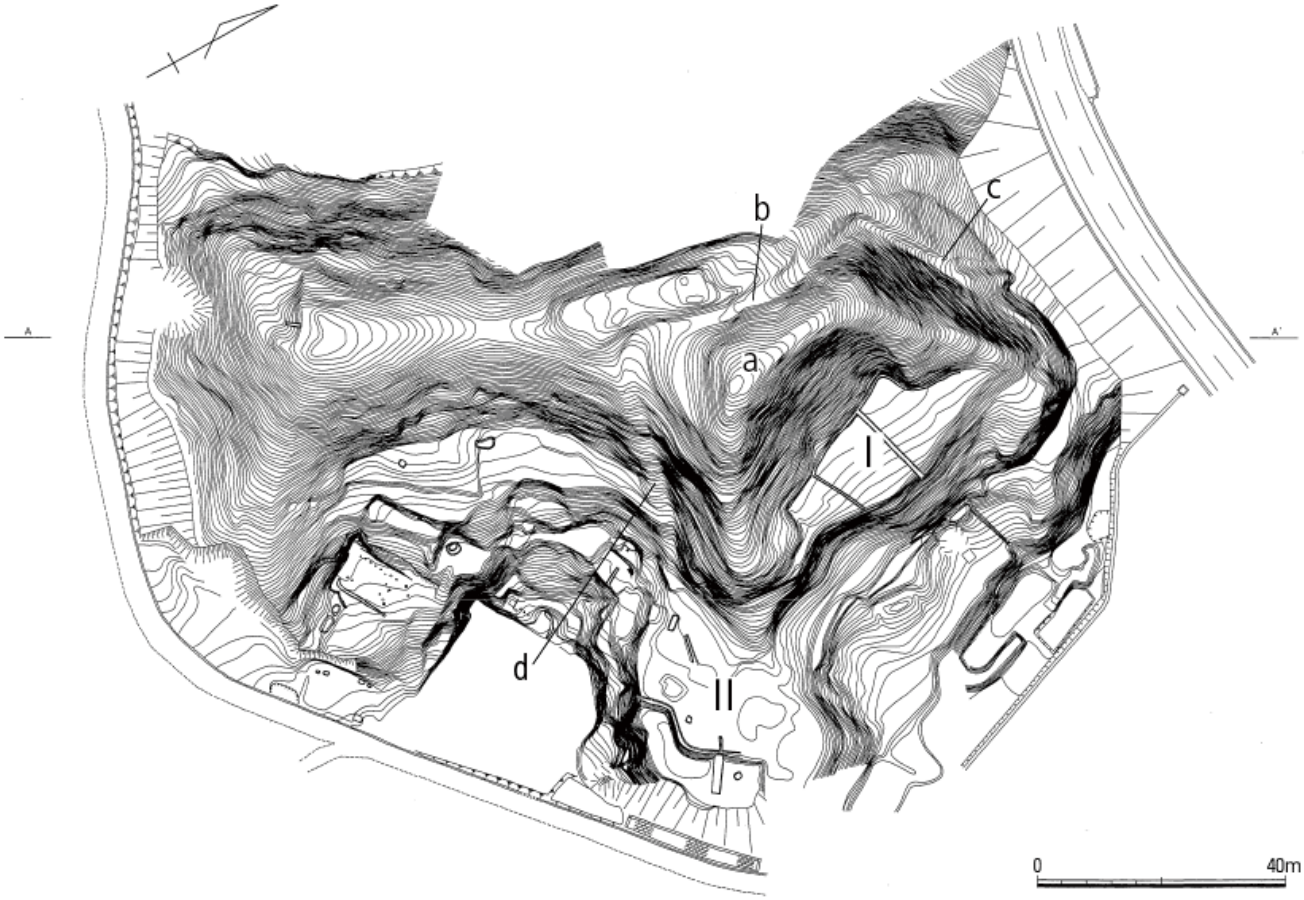


図 11：竜法師城跡地形測量図（滋賀県教委ほか 2006 より引用）

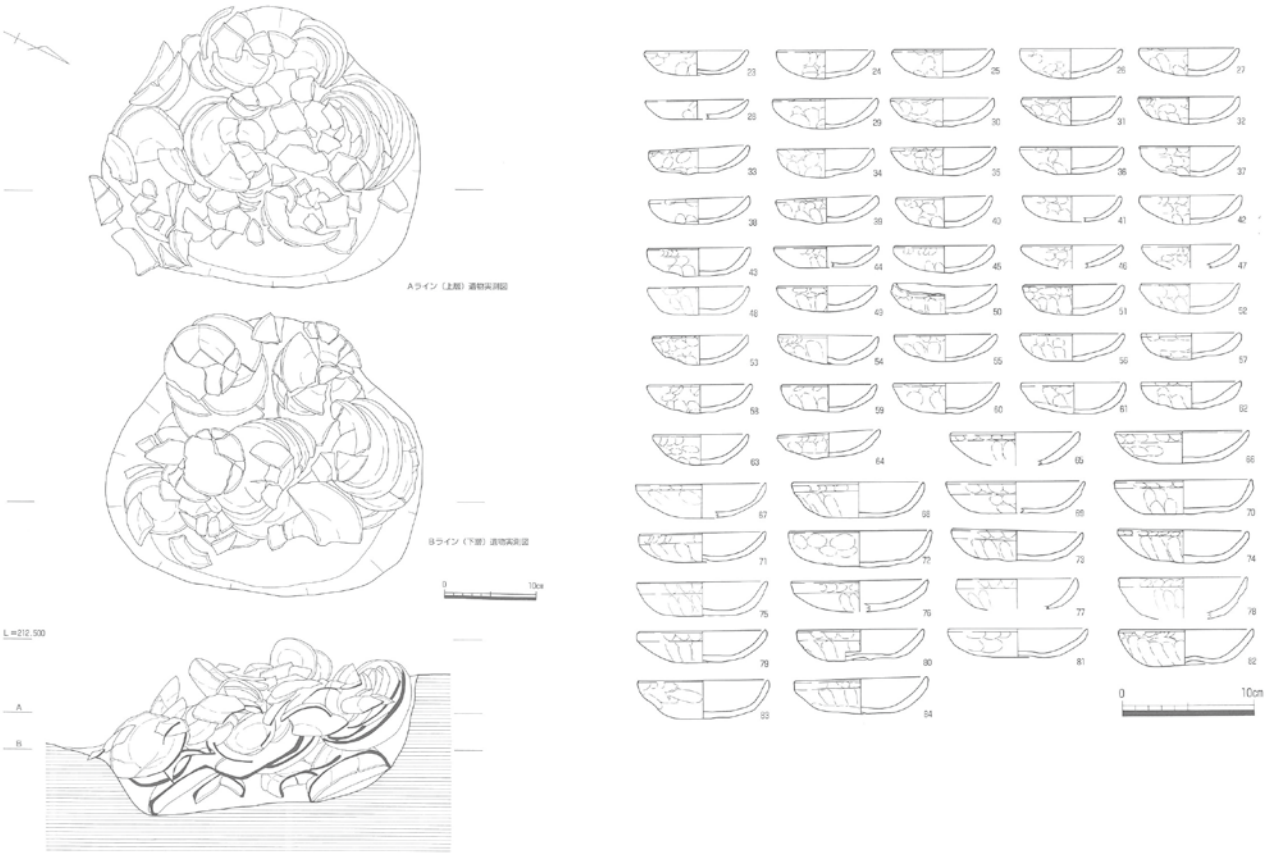


図 12：竜法師城跡土坑 C（滋賀県教委ほか 2006 より引用）

図 13：小川城跡概要図

（甲賀市史第 7 巻より引用）

《ＭＥＭＯ》

令和５年度　甲賀市城郭歴史フォーラム
「甲賀の中世城館と伊賀・乙訓の城」
資料集

令和６年１月20日発行

編集発行　　甲賀市教育委員会
滋賀県甲賀市水口町水口6053